

Nanakamado



vol. **48**

ななかまど

北海道情報大学 学内報 2010.03.31 発行



写真/多機能ビル(eDCタワー)完成予想イラスト(中央右)と現況外観写真の合成図



発行：北海道情報大学
〒069-8585
江別市西野幌59-2
TEL 011-385-4411
FAX 011-384-0134

- | | | |
|-----------|-------------------------------------|----------------------------|
| 目次 | 02 ■ 学位記授与式挙行 | 27 ■ Library News |
| | 02 ■ eDCタワー地鎮祭執り行われる | 28 ■ 第4回プログラミングコンテスト |
| | 03 ■ 大学機関別認証評価受審について | 29 ■ 雪灯小路に参加して |
| | 04 ■ 退職教員あいさつ | 30 ■ 絵本・CD「シュマリ」の制作に参加 |
| | 10 ■ 教育GPフォーラム報告 | 32 ■ 第6回ビジネスプレゼンテーションコンテスト |
| | 12 ■ 江別高校と高大連携協定書調印 | 34 ■ 学生サポートセンターより |
| | 13 ■ 映画づくりで人材育成 | 36 ■ 留学生餅つき体験 |
| | 14 ■ Developer Challengeで二連覇達成 | 37 ■ 平成21年度公開講座終了報告 |
| | 15 ■ 経営情報学研究科経営情報学
専攻学生の学会発表について | 38 ■ ゼミ紹介 |
| | 16 ■ 第2回北海道情報大学図書館賞 | 39 ■ クラブ紹介 |
| | | 40 ■ 大学主要行事等/編集後記 |

平成21年度 学位記授与式 挙行



3月19日(金)午前10時から、本学松尾記念館講堂において、平成21年度北海道情報大学学位記授与式が行われました。

経営情報学部第十八回、情報メディア学部第六回、通信教育部第十三回、大学院第十三回の合同で行われた式の模様は、会場に設置されたテレビカメラにより、全国の各教育センターにも同時中継されました。

今年度は、平成18年度に新設された経営情報学部

医療情報学科の一期生が卒業を迎える記念の年であり、式は厳粛なうちにも和やかな雰囲気の中行われました。

その後、卒業記念写真撮影、学科等別学位記授与、体育館での卒業祝賀会と続き、学位記を手にした卒業生・修了生たちは、大学との別れを惜しんでいました。(総務課)



eDCタワー地鎮祭執り行われる

去る3月10日(水)午前11時より、eDCタワーの地鎮祭が松尾泰理事長出席のもと、工事の無事を祈願し、厳かに執り行われました。

eDCタワーは北海道情報大学の開学二十周年を記念した建物であり、情報図書館、学生プラザ、レストラン、等を備えた十階建てで、平成23年3月完成予定です。

なお、eDCタワーと松尾記念館二階は、スカイウェイにより接続されます。



大学機関別認証評価受審について



(財)日本高等教育評価機構より認定された北海道情報大学認定マーク

平成16年4月1日から、全ての大学・短期大学・高等専門学校については、七年以内ごとに機関別の認証評価(文部科学大臣により認証評価機関として認証を受けた機関が実施する評価)を受けることが義務付けられています。

本学では、平成21年度に、認証評価機関である(財)日本高等教育評価機構(以下、評価機構という)による「大学機関別認証評価」を受審しました。

受審にあたっては、平成21年6月末に「自己評価報告書(本編・データ編・資料編)」を評価機構に提出し、書面調査を受けた後、同年10月8日(木)～9日(金)には、評価員五名による実地調査が本学で実施され、教職員や在学生のヒアリングが行われました。

建学の精神、学生、教育課程、教員、職員、管理運営など全十一の基準ごとの評価が行われた結果、平成22年3月に評価結果が確定し、本学は全ての基準において評価機構が定める「大学評価基準を満たしている。」との評価を受けました。

評価機構からは、本学の特徴であるeラーニングシステムやFD(Faculty Development)活動が高く評価されました。その他全ての基準において高い評価を得ることができたことは、本学にとって大きな自信につながるとともに、大学の教育研究や管理の在り方を自ら点検することで、新たな課題を発見し、改善に向けた道筋も明らかとなり、大変意義深いものとなりました。認定期間は、平

成21年4月1日から平成28年3月31日までの七年間です。

本学の自己評価報告書と評価結果は、評価機構のホームページに公表されており、本学ホームページからもご覧いただけます。(3月末公開予定)

・北海道情報大学ホームページ

<http://www.do-johodai.ac.jp/>

・(財)日本高等教育評価機構ホームページ

<http://www.jiheer.or.jp/index.html>



受審にあたり評価機構に提出した資料



「楽しく真剣に協力し合う学習」をモットーに

情報メディア学部 教授

石井 勝

本学に教職課程が設置された平成13年4月から教育への熱い思いを持った学生諸君との学び合いの日々を開始しました。爾来、私が授業担当(共同を含む)し単位を認定した学生は延べ約四千名(通学課程千名、通信課程三千百名)になります。日々が学生諸君との語らいの時であつたように思います。

今、この一文を認めるに当たり、改めて学生たちと過ごしてきた日々を思い起こします。先ほどまで研究室で「教育実習日誌」を点検していました。学生の皆さんは「今回の教育実習経験を決して忘れず、学び続けたいと思います。先生方、生徒の皆さん本当にありがとうございます。」という思いを持って教職課程の学習を終えたようです。ある学生は、「学校はただ単に勉強を教える場ではなく、教育をする場なのだ、改めて実感しました。」と記しています。教育をこのようにとらえ、教師の在り方を考えていることをうれしく思います。

二年間担当したビギナーズセミナーでは論文作成やプレゼンテーション用資料の作成指導とプレゼンテーションの様子を思い出します。読書指導も楽しいものでした。講義の最終回で、学生の一人にフルートを演奏していただいたこと、野幌の学生寮から私の住んでいる小樽市見晴町まで自転車を漕いで訪ねてきた学生のこと、彼らから就職内定の知らせをうれしく聞いています。

学内共同研究の一環として昼休みにロビーなどで「オルゴールミニコンサート」を開催したこと、毎回、学生たちと一緒にオルゴールの音色に耳を澄ます一時は至福の時間でもありました。

部活動では、着任の年に囲碁を学びたいという学生たちが顧問を求め、林現経営情報学部長のご紹介で私が担当することになりました。一時は全日本学生本因坊戦に北海道代表として参加した学生もおり、北海道大学と競い合いましたが、この九年間の傾向としては、初心者が囲碁を覚え、棋力を上げていくという活動が主でした。囲碁を愛好する教職員の皆さんのご理解・ご協力を得て学内囲碁大会を開催し、今年度まで第六回と続いています。蒼天祭では、囲碁教室を開催し、市民の皆さんや本学教職員とご家族の方々と対局や詰め碁を楽しみ、部員にとって貴重な経験となつていきます。

再度、教職課程における教育活動について記してみたいと思います。私の授業モットーは「楽しく真剣に協力し合う」です。学生諸君に対してはこのことを学習する姿勢として提起します。教育課程論、カリキュラム論、生徒指導、教育総合演習と担当したどの科目の学習においても学生諸君はこの学習姿勢を貫いてくれました。教職課程のカリキュラムの集大成ともいえるのが教育実習です。その指導訪問の際のことです。教頭先生が「来年

度以降も本校の卒業生でなくとも教育実習生を寄こしてください」と話してくれた高校がありました。それは本学からの実習生が高校生を「楽しく真剣に協力し合う」学習に導いてくれ、生徒たちが大いにやる気をだしたことで、さらに、実習生自身の研究が旺盛でその高校の教員により刺激を与えてくれたからというのです。このことに限らず、実習生が、学ぶ高校生のためにと創意工夫と努力を重ね、教材開発を行い、授業している様子は、様々なことがありましたが、今結実している本学の教職課程の姿かなと確認しているところで

す。通信教育では、働きながら(またはダブルスクールで)学ぶ学生たちからの「レポート添削のコメントが励みになりました。」「ここ、スクーリングの場が北海道情報大学そのものだと思つて、ともに語り合った仲間と学びの喜びを分かち合いたい。」といったお話しがあり、その熱意がうれしかったものです。

お別れに際しまして願うことは、学生の皆さんは北海道情報大学で学んでいることに誇りと自信をもって学習を深め、将来の社会を大事に担う有為な形成者となつていただきたいということです。教職員の皆様には親しく接していただき、毎日が楽しい日々でした。九年間、とても充実した学び合いの時でした。ありがとうございます。



情報大学を去るにあたって

表現こそ多様だが、その意味するところ「生を受けて以来、我々は生の終わりの死に向かって時々刻々と歩んでいる」という文章や言葉が妙に意識されるこの頃である。

生、死ほど大げさではないが、これまで自分史のいろいろな場面で何度も始めと終わりを経験してきたが、その流れの中でこの3月末でいよいよ本学を去ることになる。

研究室329号室窓外に目をやると、もう原始林では春の息吹が満ち始めているの見える。しかしそれは厳しかった冬の終わりでもあり、同様に自分にとっても人生のある「一つの終わり」を迎え、次ぎなる「春への出発」である。

インドでは、人生を大きく4つの段階に分けて考えるとのこと。二十代までの社会に出るための準備期間としての学生期。三十代までの社会のためめ仕事をし、結婚し家庭を作って後継者を育成する家住期、その後、世俗を離れ、人生とはなにか、自己とはなにか、宇宙の真理とはなにかなど、自己に向き合い精神的修行をする四十代の林住期、そして五十代からの晴耕雨読や、内面生活中心に天寿を全うするための死出への旅を目指す遊行期。工学的見地からすれば、限りある人生への中長期戦略の策定と実行か。仏陀に例あり。

信長の好んだと云われる「敦盛」からの「人間わずか五十年、下天の内を比べれば」、云々もここから来ているのではないのかもしれない。さて、私事ならば、インド流人生術でいけば、

とつづくの昔に遊行期に入り、今では静かに山奥の洞窟に蟄居し、死出への一步を踏み出さんはずが、如何せん凡人の身。このごろになって四十年に近い教員生活に漸く終止符を打つことができそうだ。それはそれとして有難いことかと思ったりするのもし思議だ。

しかし、翻つてみるに、流転する万物森羅万象、そして人の命も限りあることを、知識として知りつつも、我が身自身の人生の許されたタイムスパンを強く意識し、時間軸上での自己行動のあり方に思いが至らなかつたこと、あるいは中長期戦略なしに、時に流され続けてきた自分史を反省することしきりである。

ウツカマコトか「反省することは猿でも出来る」そうだが、反省出来ることはそうバカにしたものでもないと思う。

何しろ今では、これまでの自分の人生無設計を反省し、今後の人生を有為なものにするにはどうしようかなどと、真面目に考えている自分がある。顧みると、学業終業後、旭川高専、北大、東大などの国立教育研究機関で、教員生活を経験し、最後に私大である本学で長年に亘る教員生活に終止符を打つ。本学での五年間を過ごさせていただいたことに松尾理事長をはじめとする教職員の皆様一同に深く感謝したい。

五年間の在職中、特に印象に残ったのは、平成21年度後期、先端経営学科一年生向けに開講した「自己発見ゼミナール」だった。講義の回数を追

うごとに学生たちはリラックスしてきたように見え、自分自身も個々の学生が持っている能力への新しい発見があり、楽しい時間を持てた。もちろん講義そのものに工夫は必要だがそれ以前に、虚心坦懐に学生諸君に接し、信頼し、感情移入し、自分の心を聞くことが如何に大事かを学ばせてもらった。

考えるに、教員たる自分自身の学生との接触の仕方への反省を含む自己発見があり、結果として自分自身の「自己発見ゼミナール」であった。残念ながらこれまでの教員生活ではこのような体験は皆無で、反省することしきり。これまでに講義などを通して関係した数千人を数える学生諸君ごめん。

俗に、土俵の上には金が落ちているとか、現場には新しい課題や発見がある、などと云われる。これまではそういう場にながら上から目線であった自身の心の在り方に問題があつたのだろう。石舟斎の切つた一枝の牡丹の切り口を見て剣の達人を感じた武蔵と、何も感じ得なかつた吉岡伝七郎の力量の差と同様で救いたいものがある。

今回の教育の現場はまさに最後のクラスだったが、遅ればせながら、自分の人間としての目を開かせてもらったことを実感して、本学を卒業できることを幸せに思う。改めてゼミに参加してくれた学生諸君、ありがとう。

最後に、建学の精神に基づき本学が更に発展することを祈りつつ。

先端経営学科 教授

嘉数

侑昇



退職にあたって

医療情報学科が発足して一年目の4月に非常勤講師、その後9月に教員として着任以来、生命系基礎講義を担当し、学生と一緒に勉強して参りました。この3月、医療情報学科第一期生と共に「卒業」です。学生は一所懸命がんばって単位を取り卒業しましたが、私は十分な単位が取れたのか、自問する毎日です。ただ、情報大での二年半大変貴重な経験をさせていただいたことは確かです。4月からは別の大学の教壇に立ちますが、情報大での経験を生かし、精進を重ねるつもりでおります。

最後になりますが、これまでご指導いただきました諸先生方、並びに職員の皆様に深く感謝いたします。北海道情報大学のますますのご発展と、皆様のご活躍をお祈り申し上げます。



医療情報学科 教授

小山 芳一



退職にあたって

今春3月末で退職します。振返る時、開学と私の赴任が同時でしたから、この3月末で二十一年間の在職となります。平成元年4月の開学時、経営情報学部で発足した本学は、この二十年余りで、成長軌道を辿ったと云えます。

一学部(二学科)で発足した本学は、平成6年度に通信教育部、平成8年度に大学院、更に平成13年度に情報メディア学部、そして、平成18年度に経営情報学部が医療情報学科を増設した事から、学部も学科も倍増して居ます。

本学が辿った成長軌道は、間口(入学定員)の其れで表わす事が可能です。↓通学課程は、開学時に百名×二(学部)↓二百名、平成13年度にメディア学部百六十(情報メディア学科)、そして、平成17年度に、医療情報学科(七十名)を経営情報学部を増設した事で、学部定員は三百八十名となりました。

以上の事から、開学時に間口二百名だった本学は、其の十七年後(平成17年度)に間口が約二倍の大学となりました(↓平成6年度に併設された定員千二百名の

衛星を使う通信教育部は、教育関係者の注目する所となりました)。

この数字と、実員(在籍者数)を比較する事は省略しますが、実員の動向は、本学の経営環境を反映すると同時に、働き掛ける対象ともなります。定員と実員のマッチングを図りつつ、経営・メディア・医療の三分野を展開して来た本学が、「情報」と云う語を共通項(Common thread)として成長する事は、本学の(質量両面に渡る)成長軌道を描く事に結び付きません。

大学が量的成長から質的成長を追求すべき今日、本学教育課程の改訂時(初回…平成5年度)、必修(2)科目を担当した私は、延べで七百八十名の履修者を無事処理出来た事を想起しつつ。本学の成長軌道を次の二十年後に振返ったと仮定する時、其れが如何なる軌跡として顕れるか、フルタイムのプレイヤーからパートタイムのプレイヤーとなるにあたり、本学が更なる成長の軌跡を描く様祈念して、御礼の結びとさせて戴きます。

先端経営学科 教授

齋藤

直機



退職にあたって

情報メディア学部 教授

坂上 修二

平成6年4月から本学に勤務した16年間は光陰矢の如し、瞬く間に過ぎ去りました。振り返ってみますと

侵入(クラブへの勧誘のため)防止も大事な仕事でした。

んにお礼を申し上げ、本学の一層の発展を願って退職の挨拶とさせていただきます。

様々なことが思い出されます。退職するにあたり、特に思い出深かったことを記して挨拶に代えたいと思います。

平成13年度から16年度までの学生部長時代のことですが、学生部長にとって最初の仕事であった4月の新生入生宿泊研修(定山溪温泉のホテルに宿泊)が思い出されます。この宿泊研修は引率の教職員も含めると五百人を越える大所帯で、大変ではありましたが今では楽しい思い出の一つとなっております。大学を出発するときの人数確認も一仕事でした。必ず一人や二人の行方不明者がいるもので、近くの寮で寝ていた豪傑もおりました。ホテルでは自己紹介や科目履修に関する説明など様々な研修が行われるわけですが、夜11時の各室見回り点検と先輩学生のホテルへの

平成19年度から、南京大学外国語学院の学生を情報メディア学部へ三年次編入生として受け入れることになりましたが、これも大きな出来事でした。6月には編入希望学生に対する面接試験を実施するために南京大学に赴きました。これは私にとって初めての中国訪問であり、南京市内の活気溢れる様子、南京大学の規模の大きさ・歴史の深さに感銘を受けたものです。編入希望学生の日本語レベルは様々でしたが、受け答えにも作文にも熱意が溢れておりました。この訪問の後、二回訪問し面接試験を行いました。一連の南京大游学訪問と面接は大変楽しい思い出となっております。

とりとめなく思い出を綴りましたが、最後にこれまでご指導、ご協力頂いた教職員の皆様や、多くの刺激を与えてくれた学生、卒業生の皆さま





退職にあたって

本学には、1989年(平成元年)から約21年にわたってお世話になりました。この間、本学の誕生から今日までの成長・発展を間近に体験できたことは得難いことであり、微力でしたが精一杯の努力と能力を注ぐことができたことは誠にありがたく幸せなことでした。

最初の担当科目は情報処理概論とデータベースなどで、新しい大学での新しい教育を目指したいという強い意気込みで教材を準備し、毎回の授業に取り組んだことが懐かしく思い起こされます。専門分野は当時一世風靡していた人工知能でしたが、これをスタートしたばかりの通信教育部において大学として初めての放送授業(現インターネットメディア授業)において開講するという機会に恵まれました。Eメールのスタジオのカメラに向かってスライドのようなフリップ教材を提示して全国の教育センターに衛星通信で発信するという新しい教育方法の展開に未来を感じたものでした。その後、情報学科でも人工知能やソフトウェア基礎理論など、また、2001年新設の情報メディア学部ではWeb世界における人工知能を標榜する知識メディア論として追求しましたが、現在の学生には目標が少し高すぎたせいかあまり熟成しないまま終わったのが残念です。

本学での最初の大きな経験は、本学の生みの親であるSCCがチャレンジした「学習情報通信システム研究所」(SRL)設立プロジェクトのお手伝いでした。これは国家的な新技術開発につながる試験研究課題への大規模な研究投資に対応し、その基幹技術は今日のeラーニングシステムの先駆けとなるも

のでした。一年半以上の緻密な計画づくりと努力の結果、提案課題が採択されて1991年2月から7年間の研究所が開始されました。あまりお役には立っていませんでしたが、とくに後半期を担われた方々から数名が本学教員として迎えられ、近年のICT活用教育やFD推進の中核として活躍されていることには感慨深いものがあります。

1996年にスタートした本学の大学院では、四系列からなる専攻の一つを担当し、二名の一期生を受け入れました。新しいことを追究したいと考えていた矢先に海外研修の機会に恵まれ、スイスのジュネーブ大学教育心理学部(EDUC)とイギリスのオープン大学知識メディア研究所(OKI)をそれぞれ短期訪問できました。ここで、普及段階の情報ネットワークをベースとする協調コミュニケーション・シミュレーション環境の考え方を学び、また近未来を展望する知識メディアに関する諸研究に触れることができました。その後、1999年からは研究科長を仰せつかり、大学院の充実、とくに情報学系の学生の確保と研究教育の充実などに7年間取り組みました。現在では当たり前ですが、大学院での研究成果を積極的に内外の学会等で発表し、院生の研究力・発表力等を強化するとともに、大学院の研究活動の紹介と進学への働きかけを強めることに注力しました。また、情報メディア学部の進展に伴い、この分野をも包含する大学院へと脱皮する必要性などを背景に、研究科での議論を進めるとともに先進的な他大学の取組みの調査等を踏まえて、2005年には現在の三分野六教育プログラムからなるフレッシュな大学院へと進化

させることができました。これらを含む再編・改革を経て、定員の充足とともに多様な志望や能力を持つ優秀な学生を受け入れることができる大学院として一段階を進めることができたと考えています。

その後、2006年に「問題学習と適応的指導に基づく協調eラーニングシステムと教授法の開発」という課題に対して三年間の科研費・基盤研究(B)を受けることができ、これまで大学院生や共同研究者と進めてきた新しいeラーニングシステムのあり方に関する提案を含めて統合的にまとめる機会が与えられたことは、この間の一連の研究活動に対する一種のご褒美ともいえるものであります。

そのほか、外国人留学生の受け入れに始まる国際交流活動のスタートと複数の姉妹大学協定締結・交流活動等を含めて、個人的には身の丈を超える多くの意義ある課題との格闘が続きました。この数年、「勤続疲労」のせいか聴覚の障害(右に加えて左も)に見舞われ、教職員・学生の皆さんにご迷惑をかけるだけでありお役に立てなくなりました。これは残念の極みです。しかし全体としては楽しく充実した教育研究生活であったと思います。

北海道情報大学は、まだ若々しく多くの可能性に満ちた将来性ある大学だと思います。これから、そのような発展する姿を在野から楽しみに見守っていきたくと考えています。おわりにあたり、これまでのご厚誼・ご支援に深く感謝するとともに、北海道情報大学の一層の発展および皆様のご健勝を心から願っています。

情報メディア学部 教授

前田 隆

平成21年度教育GPフォーラム報告



FD委員会 WG4 谷川 健

2008年度から教務部長が設けられ、初代教務部長である富士先生が委員長となるFD委員会が発足しました。この年に、ICTを利用したFD活動をテーマにした「ICTによる自律的FD推進モデルの構築」が文部科学省の教育GPとして採択されました。今年度は、十のワーキンググループ(WG)が活動してきました。また、「ICTによる自律的FD推進モデル」を実現するためのFD支援システムCANVASの試行・改良を行ってきました。今年度のFD活動を総括するとともに来年度に向けた新たな方向性を求めて「教育力の向上で広げる可能性」と題して教育GPフォーラムが2010年3月5日に本学の211教室で開催されましたので、フォーラムの概要について報告いたします。

教育GPフォーラムは、二部構成で実施されました。第一部は、中居事務局長の司会で、長谷川学長の主催者挨拶に続いて、桜美林大学副学長の大越孝先生による「『教育の質』向上を目指して」と題する講演がありました。この講演では、大学のユニバーサル化、グローバル化に対応した桜美林大学の教育改革の取組が紹介されました。改革を進めるにあたり方向性を定めるために、大学を取り巻く環境と大学の強

み弱みを分析し、どのような学生を対象に何を目標に改革を進めるかを十分検討されました。その結果、学部を中心に縦割りの組織からリベラルアーツ系と三つのプロフェショナルアーツ系の四つの学群制への移行と完全セメスター制の導入、履修や学習を支援するアカデミックアドバイザー制度に支えられたGPA制度の導入、教育組織と研究組織を分離した組織の導入、早期卒業制度の導入などの多岐にわたる大きな規模の改革を実現されてきました。これらの改革は、学生が何を身につけるかを重視し、基礎、専攻、幅広い知識を均等に見つけられることを目的にされたもので、学生の利益を優先した結果でしょう。文系でありながら米国の大学と連携しパイロットを育成するコースを持つているのは、まさに学生に何を身につけさせるのかを重視した結果だと思えます。アカデミックアドバイザー制度により教員が学生一人ひとりを指導することがこの目的を果たす重要な役割を果たしているようです。また、これらの改革の効果を評価するために、大学教育改革センターのIR部門を設けて学習・教育の成果の分析を実施されています。この分析の結果、GPA三・〇以上が七割となつてきており、これを改善する目的で、



制限付きの絶対評価や科目の難易度(到達度)を考慮したレベル制の導入が計画されています。本学でも来年度からGPAを本格導入し、教育アドバイザー制度試行しますが、これらの取組でこの講演の内容が多いに参考になるでしょう。

続いて、大阪府立大学総合教育研究機構の高橋哲也先生による「授業時間外の学習支援を中心とした数学教育改善実践例の紹介」と題する講演がありました。この講演では、質問受付室とWeb数学学習システムを中心とした授業時間外でいかに学生を勉強させるかについての大阪府立大学における取組が紹介されました。文系の学生も含めて数学を専門としない学生も、ツールとしての数学の知識が要求されるが、高校までの理系の学習時間の減少や数学を教える教員が数学の専門教員であり、一般教育科目としての数学の教育に関する知見が少ないなどの課題がありました。これを解決するために、「覚える学習から自分で考える学習へ」、「Passive LearningからActive Learningへ」、「個人ではなく組織として対応」を目的に、特色GPとして取り組むことになりました。教える内容を統一するために、一年で教える内容を教科書として作成し、学生の能動的な学習を支援するた

めに、数学担当教員が分担して学生の質問に答える質問受付室を設置し、自主学習で利用するためのeラーニングであるWeb数学学習システムを開発されました。質問受付室で全教員が質問に答えることにより、他の教員の課題を把握し教えている内容を相互に情報共有できるようになり、学生がどこでつまづいているかを教員が認識できるようにになり、わからない学生は質問受付室に来てくれるという安心感から出題する課題の質を高めることができ、学生は質問をすることになれ能動的に学習するきっかけをうるなどの利点が確認されました。能動的に学習する意欲をさらに高める手段としてweMathemticaを利用した自学習のためのWeb数学学習システムを開発し、年々利用者が増加しています。この結果学生の授業時間以外の学習時間を延ばすことに成功しています。今後は、証明問題等を対象に理論的思考能力の育成のためにこれらの仕組みを展览展示していく計画があるようです。この講演は、いかに能動的に学習させるかが今後重要になる中で、多くのヒントが与えられたと思います。

第二部は、本学経営情報学部長の林先生の司会で、教務部長でFD委員長、富士先生から本学のFDの取り組み、

とりわけ教育GPPプロジェクトの概要の説明があったあと、十のWGリーダーおよびリーダー代理から各WGの活動報告と来年度の活動計画が発表されました。FDフォーラム終了後、関係者が集まり、教育GP推進協議会およびFD評価委員会が開催されました。この評価委員会では、本学のFD活動への教員の参加率の高さが評価され、いくつかの課題は指摘されましたがおおむね現在の取組の進め方で問題ないことが確認されました。また、これからは教員が学生を教えるという考え方から学習者が自ら学ぶようにさせること(学生中心主義)が重要であることが指摘されました。

本学のFDも二年目に入り、チュータ制度、GPA制度、学生FD活動などが試行されました。来年度は、これらの制度が本格的に動き始めるとともに、CANVASの全教員による試行やOnline Teacherを実現する教育アドバイザー制度の試行などが計画されています。来年度は教育GPの最後の年であり、いよいよFD活動の大海に出る準備を完了させる重要な年です。教員全員が一丸となってFD活動に取り組んで、自主的に学習できるような学生を育てていくことに努力していきたいと思えます。

札幌学院大学 北海道情報大学 北海道江別高等学校との高大連携に関する調印式



江別高校と高大連携協定書調印

この度、北海道江別高等学校と高大連携の協定を結ぶこととなり、平成22年4月から受講する生徒の受け入れが開始されます。道内における高大連携校としては、北海道野幌高等学校、北海道札幌東商業高等学校、北海道釧路明輝高等学校に続き四校目となります。

江別高等学校の事務情報科の生徒が、ITパスポート、基本情報技術者、メディアリテラシーの資格取得を目指し、本学経営情報学部の関係科目を大学で受講して単位を修得します。これまでの三校との連携と同様に、修得した単位は高校の卒業単位として成績判定し、さらに本学に入学した際には、本学の卒業単位としても認められます。

また、江別高校の事務情報科では、従来から生徒の資格取得に力を入れていて、平成22年度入学生からは、より資格取得向けのカリキュラムに変更されることとです。それと同時にスタートする今回の連携は、同校の資格取得支援体制の充実に寄与するものと期待されています。

なお、江別高校では、同時に札幌学院大学とも高大連携をスタートさせることとなっており、12月18日に行われた調印式では、江別高校の熊谷勉校長、札幌学院大学の西尾敬義学長代理、本学の長谷川淳学長の三者で固い握手が交わされました。



映画づくりで人材育成

情報メディア学科

准教授 島田 英二

2007年に北海道大学を舞台に「銀杏の樹の下で」という短編映画を制作しました。「北大短編映画製作プロジェクト」と名付けられたこの企画のそもその発端は、2006年に北大の学生有志が始めた「北大映画館プロジェクト」というイベントでした。昔は映画を上映していたという北大のクラーク会館に、期間限定の「学内映画館」「クラークシアター」を作るといった企画で、私は第一回開催で講演させていただいたのをきっかけに映画好きな熱い学生達と出会い、そこから企画が進んで作品を撮ることになりました。

この「北大映画館プロジェクト」と「北大短編映画製作プロジェクト」は互いに重要な関係にあります。その背景には、大学における映像教育をどう実践していくかということがあります。作品にもよりますが、私が映画祭などを通して見る国内の映像作品と海外の映像作品の間には、正直なところレベルの差を感じます。これは特に学生の作品を見たときにもっとも顕著で、同じくらいの年齢で、アイデアからテーマの選び方、表現のクオリティまでどうしてこんなに開きがあるのかと考えさせられます。そういう見方で映像教育を研究していくと、欧米の映像教育と日本の映像教育では背景が大きく違うことが分かってきました。欧米では、映像教育が義務教育の中にしっかりと位置づけられているのです。これは言い換えると小学生から映像を学んでいるということです。映像教育の先進国であるイギリスのBFI(英国映画協会)、「ムービーングイメージ」(広い意味での映像は若者の生活の中で、情報源と娯楽として大きな役割を果たしており、彼らの世界観の形成に大きな影響力があるメディアである)とし、映像教育の重要性が明確に位置づけられています。

映像教育を実践するには、実際に映像作品を作ってみることが非常に有効です。普段何気なく目にしている映像がどのように作られているのか体験することで、映像を見る目自体が変わってくるからです。一方、講義としての映像セリサクはどうしても知識の習得と「作ることそのもの(制作)」に時間がかります。講義で作った物の鑑賞批評に同じくらい時間を割いたり、さらには第三者が鑑賞できるように上映会を企画したり宣伝・販売するといった「製作」まで行うのは難しいのが現状です。その意味では北大のプロジェクトは制作から製作までの流れを有しており、映像教育・人材育成の事例としては大変意義深いものだと思います。

「銀杏の樹の下で」はこれまで六ヶ国の映画祭にノミネートされ、メキシコ国際映画祭ではなんと最優秀外国映画賞を受賞。残念ながらメキシコでは新型インフルエンザの影響で今年度の開催が中止となりましたが、昨年、映画祭からトロフィーが送られてきました。北海道で作られた作品がこうして世界で評価を受けるのは本当に嬉しいことです。

本学で映像制作の講義を行っています。人数が多いこともありどうしても学生同士で「まず作ってみる」機会にならざるを得ず、そこからのステップアップがこれからの課題です。学生がプロの現場を見たりスタップとして参加できる機会がもっとあればよいのですが、なかなかチャンスがないので、そういう意味では私の撮影現場がそういう機能を少しでも持てたらよいなと思っています。

現在は同北大の第二弾である「零下15度の手紙(仮)」という短編映画を制作中です。今夏完成予定です。今年はこの撮影現場に島田ゼミから学生が二名参加しました。また、昨年は札幌で秋に撮影したミュージックビデオの現場にも学生が本学から三名参加、島田ゼミの四年生では「踊る大捜査線3」というこの夏劇場公開される長編映画のスタップとして参加している人もいます。少しずつではありますが、新しい流れが作り出せているのかな、と思います。まだまだ頑張っていかなければなりません。情報大でも映画を作れたら面白いですが？

「銀杏の樹の下で」トロフィー

メキシコ国際映画祭のトロフィーと賞状



13 Nanakamado



新作「零下15度の手紙(仮)」の撮影風景。力チンコを担当するのは島田ゼミの中村啓一君。



RICOH & Sun Java™ Developer Challenge 2009 にて二連覇達成!

システム情報学科 准教授 棚橋 二郎

去る1月15日に本戦の行われた、株式会社リコー主催「RICOH & Sun Java™ Developer Challenge 2009」にて、本学参加チームが昨年度に引き続き「グランプリ」を受賞、二連覇を達成しました。本コンテストは、リコー社の複合機(液晶パネルによるユーザインタフェースを持ち、プリンタ・スキャナ・Fax機能を併せ持った業務用コピー機)向けプログラムを作成し、コンセプト・デザイン・プレゼンテーションといった「マーケティングの視点」および技術文書・コーディングスキルといった「技術的な視点」の双方を評価するもので、本学からは三チーム、全国から昨年度の倍以上となる十八大学二十六チームがエントリーしました。10月初めに行われた第一次選考で七大学八チームが東京で行われる本戦へ出場決定、本学からは昨年度優勝チームである棚橋Jゼミ「えべちyun飼育係システム班」が一次選考を突破、リコー様より実機をお借りし、最終選考に向けて連日深夜まで開発を行いました。

東京馬込のリコー大森事業所カンファレンスホールで行われた本戦では、各チーム十五分間のプレゼンテーション及び実機デモの後、審査員からの質疑応答を行いました。会場には参加チームの他、各インターネットメディアや一次選考で敗退したチームメンバーも大勢集まり、本戦出場チームのプレゼンテーションを熱いまなざしで見ていました。その後の厳正な審査を経て、参加

チーム交流会にて神奈川県工大・電気通信大・鹿児島大と共に大会委員長より記念品と記念盾を授与されました。グランプリを受賞した棚橋Jゼミチーム「えべちyun飼育係システム班」は、大学院二年生とシステム情報学科二・三年生の混成チームとして参加しました。受賞作品「Ewinagiol」は、マイクロプログサービス「Twitter」を複合機で利用し、書類や絵をスキャンして画像と一緒につぶやく、つぶやかれた画像を印刷する、書類をスキャンしてMEPをWebサーバーとして使って「Twitter」会議を開く、という三つの機能をもったシステムです。その先進的なアイデアのほか、特に今回



はオブジェクト指向に基いた優れたモデリングによる仕様書や、三つの機能をシームレスに連携させるために用いた実装技術が審査員より高く評価されたものと認識しています。本学参加チーム全てが本戦に出場した前回に比べ、今回は本場にレベルの高いコンテストとなりました。中でも神奈川県工大の取り組みは敵ながら賞賛に値するもので、プレゼンテーションを聞き終えた後に「ああ、今年を負けたかな、やはり二連覇というのは難しいものだなあ」と筆者が感じた程度でした。昨年度からのメインメンバーであった大学院生は今年で修了し、三連覇のかる来年は意思を引き継いだ学部生がデイベンディングチャンピオンとして参加します。三連覇：プレッシャーですね！皆様、どうぞ来年度も厚い支援と熱い声援を学生たちに送ってください！
<http://www.ricoh.co.jp/javachallenge/>
にて、本戦当日に行われたプレゼンテーションの動画など、コンテストの詳細をご覧ください。

北海道情報大学大学院

経営情報学研究科経営情報学専攻(修士課程)学生の学会発表について



情報処理学会創立50周年記念(第72回)全国大会 (於：東京大学本郷キャンパス)

3月9日	井上 喬視 ネットワーク技術 修士2年
	「ネットワークフォレンジックシステム向けトラフィックデータ保存専用ファイルシステムの開発」
	元木 一喜 メディア制作論 修士1年
	「TOC思考プロセスに基づく学生によるデザイン系科目E-Learning教材制作プロジェクトの分析」
3月10日	吉崎 順太 ネットワーク技術 修士2年
	「RESTアーキテクチャスタイルを応用したサーバプッシュプロトコルの提案」
	須藤 一弘 情報処理 修士2年
	「報道内容の印象分析のためのテキストマイニング手法」
	石井 拓郎 メディア制作論 修士1年
	「プロジェクト型学習を支援するデジタルポートフォリオの構築 ー 作品評価の集約による人材発掘支援機能の開発 ー」



表彰式は、十二月七日学生プラザにて、長谷川学長、富士副学長、中居事務局長、審査委員各位の列席の下、各賞の受賞者に対し学長から賞状と副賞(図書カード)が贈られました。続いて、立花図書館長から全体の講評があった後、優秀賞の芹田剛嗣君

と荒木俊介君から受賞者の挨拶、中居事務局長から祝辞を頂きました。式には、遠く埼玉県から通信教育部の学生も出席され、図書館見学など関係者と親交を深めていました。



先に、第二回(二〇〇九年度)北海道情報大学図書館賞が実施され、平成二十一年十二月一日に審査結果が発表されました。第一部門「読書感想文」十二編、第二部門「論文」五編、計十七編の作品の応募がありました。本学の図書館賞は、学生の読書力及び表現力の向上を図ることを目的に二〇〇八年度から実施されています。二〇〇九年度からは、国際交流協定校である南京大学外国語学院日本語部の学生を募集対象に加え五編の作品の応募があるなど日本文化に対する理解の向上など所期の目的が果たされました。



立花図書館長を委員長とした全図書委員及び協力教員二名構成による審査委員会の厳正な審査の結果、下記のとおり受賞作品が決定されました。残念ながら、今年度は両部門とも最優秀賞の該当作品がありませんでした。

等との和やかな懇談が行われ、読書の楽しみや論文作成の苦労などを語り合いました。また、応募者のアンケートでは、「応用技術者試験の勉強も平行して行っていたため、苦労した」、「図書館賞の応募を通してより意欲的に読書するようになった」、「情報技術または産業に関する最新の統計書の充実を望む」、「論文作成の際、参考文献の書き方が良く分からず苦労した。応募要領に記述方法等を明確に記して欲しい」、「論文の書き方、まとめ方に関する図書の整備を望む」、「卒業論文作成のための「情報大学学生のための論文の書き方を示したガイドブックがあれば良い」など、今後の改善につながる貴重なご意見、希望が寄せられました。

選考結果一覧

第二回(二〇〇九年度)北海道情報大学図書館賞

第一部門：読書感想文

☆最優秀賞(該当作品なし)

◇副賞：図書カード(三万円分)

☆優秀賞 (三作品)

◇副賞：図書カード(二万円分)

○一生感動 一生勉強

― 相田みつをの『本気』を読んで

南京大学外国語学院

日本語学部日本語クラス

張葉 玉瑩

○『ソフィーの世界』と『私の世界』

情報メディア学部

芹田 剛嗣

○伊坂幸太郎著『魔王』を読んで

情報メディア学部

荒木 俊介

☆佳作 (二作品)

◇副賞：図書カード(二万円分)

○ホンダからみる人間力

― 『ホンダをつくったもう一人の創業者』を読んでの感想

経営情報学部

小早川直紀

○『龍馬がゆく』を読んで

経営情報学部

前田 光

※佳作二編については、紙面の都合により、図書館ホームページに掲載させていただきます。

☆奨励賞 (七作品)

◇副賞：図書カード(三千元分)

○「たった3秒のパソコン術」を読んで

経営情報学部

大久保 翼

○「Keith Richards files」

経営情報学部

土谷 秀和

○村山由佳「すべての雲は銀の…」を読んで

経営情報学部

松本 智貴

経営情報学部

経営ネットワーク学科三年

経営ネットワーク学科三年

講評

審査委員長 図書館長 立花 峰夫

第二回北海道情報大学図書館賞の応募総数は十七点で、昨年度より六点増えました。特に通信教育部生及び南京大学外国語学院日本語学科生の応募があり、この賞が一層厚みを増し国際性を持ちえたことを大変嬉しく思います。応募された皆さんに心から感謝します。

残念ながら、本年度は、最優秀賞については、第一部(感想文部門)第二部(論文部門)ともに「該当作品なし」となりましたが、これは審査基準を厳しくしたからではありません。読み手(審査員)を満足させる力が今一つ不足していたからです。

読書感想文であれば、対象となった作品をまだ読んでいない人に対しても、是非それが読みたくなるようなものでなければなりません。論文であれば、なおさらその主張(意見・判断)に客観性と説得力が求められます。根拠のない単なる書き手の主張(意見・判断)だけでは読み手は納得しません。根拠となる資料・データを正確に適切に示すとともに、論理的な筋道によって文章を構成していく必要があります。今回そうした説得力に今一つ欠けたものが多かったといえます。

優秀賞受賞の張葉玉莹さんの「一生感動 一生勉強―相田みつおの『本気』を読んで―」は、相田みつおの詩集を読んだ感動が素直な日本語で表現されています。芹田剛嗣君の「ソフィーの世界」と「私の世界」は、「ソフィーの世界」を自分の世界と重ね合わせ、「生きること」、「考



えること」、「問いをたてること」の意味を考え、人生の根本問題に真摯に向き合おうとする姿勢が評価されました。荒木俊介君の「伊坂光太郎著『魔王』を読んで」は、「全知の語り手」が消えてしまった現代小説の「空所」

の持つ意味に焦点を合わせて、現実の生活感覚に基づいて「政治や「無意識」の問題領域と関連づけて論を展開している点に好感がもたれました。論文部門で佳作となった那須美穂さんの「環境問題を考える」は、大変タイムリーなテーマであり、大きな問題を特に「漂着ゴミ」と「砂漠化」の問題に絞って論じた点が評価されました。ただ、データの典拠が不明確である点に問題が残りました。

その他、いずれも読書の楽しさや独自の考えを必死に伝えようとする努力を感じさせるに出会えたことは大きな収穫でした。来年度もさらに多くの応募作品が寄せられることを期待します。

なお、平成二十一年十二月二十二日、汪平先生にもご臨席いただき南京大学外国語学院でも授賞式を行いました。あいにく優秀賞の張葉玉莹さんは都合で欠席でしたが、出席した佳作の陳静静さん、奨励賞の鄧海蓉さん、王超君、楊萍さんの四人にそれぞれ賞状と副賞を授与しました。受賞者の喜びに直接触れたいばかりでなく、来年度是非応募したいという南京大学院生の声を聞くことができたのも嬉しいことでした。

○赤川次郎：「幽霊列車」を読んで
通信教育部

○近藤淳也著『「へんな会社」のつくり方』
経営情報学部 福田 嘉之

○「光の帝国」
経営ネットワーク学科三年 松山 雄太

○「真夏の死」と「小旗」
システム情報学科三年 齊藤 宏太

○「光の帝国」
南京大学外国語学院 陳 静静

○「光の帝国」
日本語学部日本語クラス 楊 萍

第二部門：論文

☆最優秀賞(該当作品なし)

◇副賞：図書カード(三万円分)

☆優秀賞(該当作品なし)

◇副賞：図書カード(二万円分)

☆佳作(三作品)

◇副賞：図書カード(一万円分)

○環境問題を考える
経営情報学部

○現代における子ども「遊び」事情と携帯ゲームの関係
医療情報学科四年 那須 美穂

○日本語化した外来語
経営情報学部 池島明日美

○日本語化した外来語
経営ネットワーク学科四年 池島明日美

○日本語化した外来語
南京大学外国語学院 鄧 海蓉

○日本語化した外来語
日本語学部日本語クラス 王 超

○日本語化した外来語
南京大学外国語学院 楊 萍

○日本語化した外来語
日本語学部日本語クラス 楊 萍

○日本語化した外来語
日本語学部日本語クラス 楊 萍

○日本語化した外来語
日本語学部日本語クラス 楊 萍

○日本語化した外来語
日本語学部日本語クラス 楊 萍

○日本語化した外来語
日本語学部日本語クラス 楊 萍

○日本語化した外来語
日本語学部日本語クラス 楊 萍

○日本語化した外来語
日本語学部日本語クラス 楊 萍

○日本語化した外来語
日本語学部日本語クラス 楊 萍

○日本語化した外来語
日本語学部日本語クラス 楊 萍

○日本語化した外来語
日本語学部日本語クラス 楊 萍

○日本語化した外来語
日本語学部日本語クラス 楊 萍

○日本語化した外来語
日本語学部日本語クラス 楊 萍

○日本語化した外来語
日本語学部日本語クラス 楊 萍

○日本語化した外来語
日本語学部日本語クラス 楊 萍

○日本語化した外来語
日本語学部日本語クラス 楊 萍

○日本語化した外来語
日本語学部日本語クラス 楊 萍

○日本語化した外来語
日本語学部日本語クラス 楊 萍

○日本語化した外来語
日本語学部日本語クラス 楊 萍

☆奨励賞(二作品)

◇副賞：図書カード(三万円分)

○日本人の人情意識と強者崇拜
南京大学外国語学院 王 超

○日本人の人情意識と強者崇拜
南京大学外国語学院 王 超

○日本人の人情意識と強者崇拜
南京大学外国語学院 王 超

○日本人の人情意識と強者崇拜
南京大学外国語学院 王 超

○日本人の人情意識と強者崇拜
南京大学外国語学院 王 超

○日本人の人情意識と強者崇拜
南京大学外国語学院 王 超

○日本人の人情意識と強者崇拜
南京大学外国語学院 王 超

○日本人の人情意識と強者崇拜
南京大学外国語学院 王 超

○日本人の人情意識と強者崇拜
南京大学外国語学院 王 超

○日本人の人情意識と強者崇拜
南京大学外国語学院 王 超

○日本人の人情意識と強者崇拜
南京大学外国語学院 王 超

第一部門：読書感想文



一生感動 一生勉強

—相田みつをの『本気』を読んで

南京大学外国语学院日本語クラス 張葉 玉莹

日本現代の詩人・書家相田みつをの書いた詩集『本気』を読んだことがあるのだろうか。もしも、読んだことがなかったら、ぜひ一度読んでみてください。その詩集は誰にでも読める文字、誰にでもわかる言葉の集まりであるのみならず、何らかの困難に出会ったり、挫折したりしている人、つらい気持ちにある人たちに向けてのメッセージ(詩)でもある。去年の始め、日本語の授業の中で、私は偶然、日本人の先生の勧めによって相田みつをの『本気』という詩集に巡り合った。それは手に入ると、すぐ大切にして手放すには及ばない。というのには、その中にイラストがいっぱい入って、かたい活字体で書かれたのではなくて、相田自身のいきいきとした独特の書体や、心に響く人生訓のような文字に強く引きつけられたからだ。

五首くらいの短詩からなっている。不思議なことに、元気で調子のいい時に読むことと、疲れたり落ち込んだりした折に読むことなら、同じ作品が全然違うような魔力がある。相田みつをの作品はどうか、ありありと映り出す鏡らしくて、その詩集の世界に身を置くと、うらうらと照らす日差しのようにいつも温もりに囲まれ、胸をすうつとさせる。では、『本気』について自分でしみじみと感じたことを少し述べたいと思う。

まず第一は、やさしい心を持ち、幸せは自分の手に握ることだ。「強い人になる前に優しい人に」これは相田みつをが教えてくれたモットーだ。一般的に言えば、人間は立身出世のため、誰でも強い人になりたがっている。しかし、その前にやさしい人になれるか否か、よく考えたことはないだろう。われわれ人間はふつう、自分の子供や父母、親しい人に対してやさしくできるのにひきかえ、すべての人々、とりわけ身の回りの見知らぬ人に対しては、やさしくできるかどうか、ちよつと疑問になるかもしれない。強い人になる前に、やさしい人になるということは、とても簡単そうに見えるが、行動に移すと、どうしても容易ではな

いだろう。ある場合、人間としてのやさしさの喪失のせいで、世間の和が崩れるし、人間関係がドライになることがある。やさしい心を持てばこそ、人間と人間の間に本当の愛の温かさがあると思う。だから、人間は強い人になる前に、愛のハートをもち、誰でもやさしく付き合せて生きていけば何よりだ。

また、諸々の欲望に満ちたこの時代で、純真な心を持つのはなんと大切なだろう。こんなすつきりしている文が書ける相田みつをはとても純一でやさしい心を持っている人だと思う。「幸せはいつも自分の心が決める」、「美しいものを美しいと思えるあなたのこころが美しい」。こんな短い詩文を味わってみたら、思わず心の底から、「ああ、なるほど。まったくそのとおりだなあ」と相槌を打ちたいものだ。今、テンポが素早いこの世の中では、「あなたは今幸せですか」と聞かれると、たぶんわれわれの多くが「いいえ、だって、いま景気が悪いため、毎日仕事に追われても首になるかすつごく心配して、びくびくしながら日を過ごしてるし」といったものを言うおそれがある。ただし、注意すべきところは、これら「不幸せ」と感じた人の半分以上は他人の目から見れば、「幸せ」と見なされる人かもしれない。では、なぜ不幸だと思っている人がそんなに多いのだろうか。それはすべてあなたの心が濁っているからだ。もし、どんなことを不満がり、いつも暗いことばかり考えていると、無論あなたは幸せと感じるはずがない。もしも、自分の考え方をちよつと変えてみたら、もう一つ違う光景が見えてくるようになる。どんなことに対して、感謝の念を込めて、もう一度自分の境遇をよく見て、一つ一つ小さな幸せを拾って行こうものなら、身辺がきつと明るくなり、日々の幸福感を感じながら生きていけるものだ。つまり、幸せか不幸せか、あなたの立場に

左右されるものではなく、あなたの心が決めるのだ。穏やかで安らかな気持ちで世界を見直した時、心が万事の元だ。心が清らかで美しくなるかぎり、物事の本来の姿が自然とうつり、美しいと思えるようになるわけだ。美しい心の持ち主は幸福だ。

第二に、悩みや失敗に出会ったら、決して尻込みをしないことだ。

相田みつをは、『本気』において「人生の弱さ」をはつきりと教えてくれた。「七転八倒 つまづいたり ころんだりするほうが自然なんだな にんげんだもの」という詩文の通り、人生の道では、確かに誰しも順風満帆だというわけではない。「しんどい、もうあきらめようか」と思った時こそ、「逆境にくじけるな。苦労は必ず報われる」と強く信じて、もう一回だけ、そして、もう一步だけ踏み出してみたらと思う。というのは、辛いこと、苦しいこと、その悩みがいっぱいあればあるほど、きつとすばらしい思い出になるのだ。「人間の強さは何度転んでも起き上がること」のように、失敗しても負けても転んでも、絶対怖がることなく、人間は必ずそこから起き

上がるのでできるからだ。たとえ百回も失敗しても、百一回起き上がれば、それこそ「勝つ」だと確信している。人生はそのたびにかえってプラスの価値を持つだろう。その点については詩集の中の「肥料」という一節の中でもよく説明してくれた。それは「あのとときの ああ苦しみも あのとときのあの悲しみも みんな肥料になったんだなあ 自分が自分になるための」だ。経験あるいは体験の積み重ねは人生にとって、もっとも大事な富だろう。その「肥料」としての富はお金で買えないものだ。

私は中学校一年に入った時、テストの成績に悩んだ覚えがある。月に一回ほどのテストで、成績がよくない場合、すぐ機嫌が悪くてコンプレックスを持っていたものだ。結果ばかり気にして重視すると、悩みがもっと強くて、どうとう悪循環になると気がついた。自分の弱さを乗り越えて、勉強の積み重ね、その過程を大事にすれば、結果よりもっと重要だと認識してからはじめて、その楽しさを味わえるようになった。これからどんなことに出会っても、悩みや失

敗は私にとって決して恐ろしいものではなくて、大事な「肥料」になれる。

相田みつをは失敗などに面する時だけではなく、様々な面で生きてゆく力を与えてくれた。「自分の花 名もない草も実をつけるいのち いっぱいに自分の花を咲かせて」「子供へ一首 どのような道を どのように歩くとも いのち いっぱいに生きればいぞ」膨大な社会システムの中で、誇りに思う特技を何一つも持たない私はすつごくちっぽけで、ごく平凡な人に過ぎない。周りのクラスメートは皆あれこれの特技を持ち、私は本当にうらやましいものだ。歌もあまりうまくできないし、踊りもできないし、楽器にも精通していないのだ。私にできるのは読書と水泳だけだが、自分なりの実力が証明できる賞はめったに貰わなかった。ちよつと気を落としたりしたことがある。ところが、上の詩文を目にすると、ずいぶん前へ進む勇気が湧いてきた。ごく平凡な人としても、平凡ではない人生を追求すべきだ。悔いがないように全身全霊に頑張ってみれば、実あるものを収めることができる

信じている。一人一人は世の中でそれぞれ違う役割を果たしているはずだ。平凡な人でも自分なりに力を尽くしさえすれば、きつと多かれ少なかれ役に立つ人になれるだろう。だから、私は決して卑屈になるものではない。結果はいいかどうかそれほど大切ではなく、最も大事なはその過程の楽しみだなあと思う。とりあえず、自分の弱点を十分に認識するとともに、自分肯定をもち、そして、「いのち いっぱいに自分の花を咲かせて」、たゆまなくマイペースで自分の夢を追いかければ、幸せな人になれるのだ。

第三に、誠実に生きていることを尊いと思うことだ。

相田みつをはの『本気』によく出ている言葉は「いのち」だと言つてよい。「いのち」はちよつと古くさい話題のようだが、彼の作品をよく味わってからは、改めて「いのちの尊さ」を感じさせた。「いのち アノネ にんげんはねえ 自分の意志で この世に生まれてきたわけじゃねえんだな だからね 自分の意志で 勝手に死んではいけねんだよ」「いのち あ

ね 自分の意志で 勝手に死んではいけねんだよ」「いのち あ

ね 自分の意志で 勝手に死んではいけねんだよ」「いのち あ

ものは 自分のいのちなんだよ
だから すべての他人の いのち
が みんな大切なんだよ。まっ
たくその通りで、われわれは自分
の意志によって世の中に生まれて
きたわけではなく、また、死ぬと
いうことも自分の意志ではないの
だ。命は自分にも他人にも大切だ。

しかし、ちょっと恥ずかしいこ
とに、私は中三になってからでな
いと、命の尊さがちつとも感じら
れなかった。その前、「死ぬ」と
いう言葉は口癖になるほど、何か
するとよく口にしていたものだ。「し
んどい、本当に死ぬほどたいへん
だった」「今日は死ぬほど疲れた
わよ」「そんなにづらいなら、い
っそ死んだほうがいいかしら」。
でも、中三の時、あることによっ
て、私の「死生観」はすっかり変
わった。クラスメートのQ君は成
績もすごくいいし、運動にもとて
も得意だし、非常に明るくていつ
も笑っているやさしい子だった。が、
「天に不測の風雲があり、人に旦
夕の禍福あり」という中国の諺の
通り、あんなに元気な彼は急にひ
どい病気を患った。それは不治の
病の癌だった。そんなことが自分
の近くで起こるなんてどうしても

思ってはいらなかった。高校入
試が近づくにつれて、病気で彼の
体がしだいに弱ってきた。それに
しても、私たち同級生が病院へお
見舞いに行った時、強がりのQ君
は相変わらずいつも暖かい笑顔を
見せてくれた。彼の笑顔の裏には
どれほどつらくて苦しかったのだ
ろうか、その時の私たちは想像し
かねる。彼の笑顔を見るたびに、
その一瞬だけは「この子は病んで
いる」とはなかなか信じられなか
った。病気が治ったら、きっと皆
さんといっしょに頑張るぞといっ
た信念は彼の笑顔から漏れたらし
い。残念がらが、結局、病魔にと
りつかれていた彼は病気がかっ
てから一年足らずでなくなってい
まった。人間の力は必ずすべてに
打ち勝つことができるとはよく言
っているが、その時より命のもろ
くて弱さを如実に感じたことがな
い。そして、その時から、両親が
くれた命がどれだけ大切なのか、
つまり、「命の尊さ」がわかって
きた。人間の命は宇宙に比べれば
けっこう短いからこそ、私たちは
それを大切にしなければならぬ
のだ。どんなにつらくても空しく
ても悲しんでも、「死んじゃえ

いいじゃん」という考えはどうし
ても頭に入ってこないでください。
生まれたからには、この一度しか
ない自分の命をしっかりとらえ
るべきだ。同じ道理で、自分の命
にせよ、他人の命にせよ、ちゃん
と守っていかねなければいけない。
最後に、その詩集の特徴は分か
りやすく、真義に富んでいることだ。
相田みつをの詩集のチャーミン
グは男女老若でも読めることだ。
彼が用いた文字はすべて簡単なも
ので、しかも短いセンテンスだ。『本
気』を読むには一時間ならもう十
分だが、心を打たれると同時に一
生もかかるほどいろいろと考えて
勉強する必要があると思う。手当
たりしだいに取ってくるような一
言ばかりだが、淡々として飾り気
がない詩文が生活の本質を明らか
にした。心を静めて、彼の詩文を
読みながら、禅の世界に入るらし
く、その真義が味わえるようにな

るとともに、いつも親しく感じら
れ、先輩の人が弁舌さわやかに言っ
てくれたような気もする。日常生活
から生み出した言葉はまた生活に戻
ったということだ。彼の詩集はやさ
しいセンテンスばかりだからこそ、
自然に涙もわいてくるほど大いに感
動されて、愛読書になった。
あなたは人生に戸惑ったことが
あるのか。あなたは熱情がこんな
にと湧かないと思うのか。あなた
はどうに感動とは何かを忘れたの
か。相田みつをの『本気』はそん
なあなたの心を癒すための本だ。
その詩集の扉を開けて、相田の足
跡について、いっしょになくした
自分、夢と無邪気さを取り戻そう。
とにかく、相田みつをは『本気』
を通して、「主観的能動性の大切さ」、
「人間の弱さ」、「人生の輝かしさ」、
「いのちの尊さ」といった真義を
教えてくれた。よかったら、ぜひ
その詩集を読んでください。



『ソフィーの世界』と『私の世界』

情報メディア学科三年 芹田 剛嗣

「いったい私はだれだろう？」
誰しもそんな疑問を持ったことが
あるだろう。しかし、この問いに
答えることのできる人はどの程度

いるのだろうか。私自身もこの問いについて考えたことはあるが、残念ながら答えは見つからなかった。そんなときに、この『ソフィーの世界』に出会った。読後に色々と思うことはあったが、結局はこの本の読後でも答えを見つかることはなかった。もちろん、私は「芹田剛嗣」という人間でいてそれ以上でも以下でもない。これが答えなのかもしれないが、そうでないのかもしれない。最終的に私はこれの答えを見つける途中で、重要なのは答えではなくこの問いを立てたことにあることに気付かされる。

この本『ソフィーの世界』は哲学の入門書として知られているが、ミステリーであり、ファンタジーであり、児童書でもあるという異色のベストセラーである。哲学者との対話形式で物語が進むため哲学に詳しくなくても読みやすいように書かれている。簡単なあらすじは私たちと同じように何事もなく普通に十四年間を過ごしてきた少女ソフィーのもとにこの簡単なようで難しい質問「あなたはだれ？」と一行だけ書かれた一通の手紙が送られてきたことで幕をあげる。

この一通の手紙はソフィーの運命を大きく変えることになる。手紙に書かれていた質問の内容に興味を持ったソフィーは手紙の送り主であるアルベルト・ノックスに導かれて哲学の旅に出ることになる。ソフィーのもとにはその後「世界はどこからきた？」などの哲学的な質問が与えられることになり、物語は古代ギリシアから現代までの哲学の歴史といふべきものを対話形式で辿ることになる。

私自身も中学生というソフィーに近い年代の頃に、「いったい私はだれだろうか？」という疑問を持ったことがある。この年頃というのはそういう考えを持ちやすいのかもしれない。なぜそういった考えに至ったかという過程は忘れてしまったが、何日も通して考え続けていたという事実だけは今でも鮮明に覚えている。さすがにソフィーのように自分の生活が一変してしまうような事態にはならなかったが、世界観が変わったという点については大いに賛同できる。現役の大学生がこういうのもなんであるが、なぜ学校は哲学のようなことを教えないでくだらないことばかり教えているのだろうかとい

うソフィーの意見を馬鹿馬鹿しいと笑い飛ばすことさえできない。それほどこの本で揭示されている「哲学」という名の問いは深く考えさせられるものばかりであった。昔からそういう考えの断片があったからか、高校で私はちゃっかりと倫理を選択した。ソフィーが教わったことほどではないにしろ、倫理の授業を教わることで充実した時間を過ごせたと思う。それもこれも元を辿れば、「いったい私はだれだろうか？」といった問いに還ることになる。

物語ではその後、意外な展開が訪れる。『ソフィーの世界』は劇中劇であり、ソフィーは、自身が劇中劇の登場人物に過ぎないことを知るのだ……。ソフィーは高次の存在によって造られた存在であった。では私はどうであろうか。造られた存在であるという証拠はないが、造られた存在ではないという証拠もない。詰まるところ、私もこの「私の世界」という造られた空間の中で誰かによって造られた存在なのかもしれない。もしそれが事実だと気がついたとき、いったい私はどうするだろうか。気が気でないのではないだろうか。

少なくとも今まで通りの生活などではいけない。若しくは造られた存在である私は何事もなかったかのように振る舞うかもしれない。

そんな私と対照的にソフィーは行動を起こした。物語の最後で、ソフィーは物語から脱却し、読み手の世界へ行くことになる（もつとも読み手側世界に干渉はできないのだが）。こここの部分がこの物語がファンタジーと分類される最大の所以だと思われる。今まで哲学を根本に置いてきたのに、いきなりファンタジー色を出すのは一見ミスマッチに思われる。だが、私はそうは思わない。ソフィーは物語から脱却したことによって永遠の命を得ることになる。それは死という抗うことのできない運命に打ち勝ったのである。ここに、人は運命に抗うことができるというメッセージが含まれていると私は思った。加えて、不死の存在になったことで、生を実感することができなくなったという哲学的な考えも含まれているようにみえる。ファンタジーであっても哲学を放棄することはしていないのだ。もちろんこれらは私個人の解釈にしか過ぎないのだが、筆者は我々

に考えろと言っているようにも思える。「考える」ということは物語の始めから終りまでずっと重要とされてきたことである。物語を終えるにあたって、あえてファンタジー色を加えることでその点を強調したのではないか。いわばこれはアルベルトがソフィーに手紙を与えたように筆者から読者に与えられた手紙なのかもしれない。不況と言われている今現代では、益々「考える」ことが必要とされている。そこでこの本を読んだことで「考える」という行為の重要性を再認識させられたことを幸いと思い、これからの生活を少しでも豊かになるようにしたい。

さて、物語が終わるにあたって先程の解釈と違いはつきりと明らかになった事実というものもある。そもそもソフィーが劇中劇の登場人物ということがわかった時点でソフィーに与えられた「あなたはだれ？」といった質問に対して答えが出てきてしまったのである。「いったい私はだれだろう？」ソフィーとは違い我々はどんなに時間が経っても、どれだけ考えてもこの問いの答えは見つからないように思われる。ならばこの問いに対し

て費やした時間は、考え抜いた内容は無駄なのだろうか。しかし、私は知っている。結果だけが重要なのではなく、過程も重要であることを。実際に現実では、過程が重要視されないことが多い。それでも過程で積み重ねたことは結果以上に大切なものであると思える。それに自分自身の過程を正しく評価できるのは、他の誰でもなく自



伊坂幸太郎著「魔王」を読んで

経営情報学部システム情報学科三年 荒木 俊介

分しかいない。だからこそ過程というものは自分に誇れるものではない。とはいえず、これまでの過程を直すことは不可能である。ただ、これから先にも過程というものは続いていく。この本に出会えてこのことに気づくことができたのだから、これからは少しでも自分に誇ることのできる過程を気づいていきたいものだ。

この本を手にし、最初にあらすじに目を通したとき、この本は日常の裏に潜む非日常に主人公が何らかの形で巻き込まれ、念じたことを相手が口にするという「腹話術」の能力を用いて「魔王」と闘うというファンタジー要素を含む小説だと思いました。「腹話術」という力を用いてどう「魔王」と立ち向かっていくのか、そんな疑問と期待を抱きながら小説を読み始めたことを覚えています。

たらず、超能力もあるかないかもわからない存在が希薄としたものでした。期待を裏切られたと思いはしたものの、「自分の思ったことをまるで腹話術のように他人が話す」という偶然の重なり、そして「ムツソリーニのように民衆を扇動する政治家」にどこか惹かれるものを感じ、読むことを止めることは出来ませんでした。

確信し始めると、遊園地で弟である潤也に読唇術の練習と言って協力させ、能力の有効範囲を確かめたり、サッカーのテレビ中継で解説者に「負けるが勝ち！」と言わせようとするので、テレビの間にも有効なのかを調べたりして、安藤はその能力の制限について考察していきます。

ここで登場する安藤の持つ「腹話術」という能力。彼の能力は本物だったのか、それとも積み重なった偶然だったのか。

物語が進むにつれ、その疑問は深まっていきました。能力が存在するという確固とした証拠もなければ、存在しないという証拠もない。まるで煙に巻くように正体を明かしはせず、物語は淡々と進んでいきます。

そして並行するように描かれる政治家、犬飼。揺らが無い自信を持った姿勢を見せ、民衆に問いかけるような演説を繰り返す犬飼は、心の底では一体何を思っていたのか。ムツソリーニがしたように日本をファシズムへと向かわせようとしたのか、それとも民衆のことを考えた政治活動だったのか。あるいは自身の地位という欲望に過

ぎなかつたのか。

考え始めれば疑問は尽きません。安藤が自身の能力に確信し始めたとき、周囲で起こり始めた様々な事件。安藤の周りに現れる不審な影。かつての旧友、島との再会。ドゥーチェのマスター。けれどこれらの疑問は一つとして正体が明かさせることはありませんでした。

そんな数々の疑問に対し、主人公がしきりに口にする「考えろ、考えろマクガイバー」という台詞こそがムツソリーニのファシズムのように、作中で紹介された宮沢賢治の「注文の多い料理店」のように、ひっそりと作者伊坂幸太郎氏が仕掛けた読者に対する扇動だったと思います。作中ではつきりとしなない事柄を目にしたとき、確かにこの「マクガイバー」の一文を読むと無意識の内に何が正しいのか、何が真実なのかを考えさせられました。

後編「呼吸」に入れば物語は安藤の弟である潤也の話に移り、潤也の恋人であった詩織の視点から潤也の物語が描かれます。この潤也もまた兄のように「幸運」という特別な能力を持っており、やがてその能力に気づき始めます。

潤也と詩織はテレビや新聞などのメディアから隔離された生活を送っており、友人や同僚から話を聞くことで世間情勢について知っていきます。傍から見ればそういった情報にあまり興味がないように思えますが、読み進めれば二人は政治や憲法について談義するところが多く、興味がない訳ではない、むしろ興味があるように思えてきます。

この後編「呼吸」での焦点は「兄、安藤の言っていた犬飼のファシズムのような政治に対し、潤也は一体何を考えているのか」という一点に尽きます。「幸運」という能力に気づいた潤也は金銭を増やし、最後にはまるで何かと立ち向かう準備をしているような姿勢を見せます。潤也は得た莫大な金銭を何に使い、何と立ち向かっていこうとしているのか。

作中で紹介された「クラレッタのスカート」がまさにファシズムのように流されていく民衆の中で、潤也が一人立ち向かっていこうとしていることを暗示しているように思えます。「クラレッタのスカート」というのはムツソリーニとともに処刑され、群衆の目前で逆

さ吊りにされたクララー・ペタツチのスカートがめくれているのを一人の男性が直したという話です。彼は民衆が唾を吐き、野次を飛ばしている最中、その群衆に流されることなく自分の考えを貫き通しました。「兄貴は負けなかった。逃げなかった。だから、俺も負けたくないんだよ。馬鹿でかい規模の洪水が起きた時、俺はそれでも、水に流されないで、立ち尽くす一本の木になりたいんだよ」と言う潤也が行おうとしていることこそがまさに、「クラレッタのスカート」を直す行為ではないかと思えます。

前編では「でたらめでもいいから、自分の考えを信じて対決していけば、世界が変わる」という信念を持ち、自分には世界を変えることは出来ないと感じながら群衆に流されることなく安藤は立ち向かっていきました。後編では「クラレッタのスカート」のように自分の信念を貫き、潤也が何かと立ち向かう姿勢を見せています。この二人に共通していることは流されることなく「見えない何か」と立ち向かっていく姿勢です。この「見えない何か」こそがゲートの詩にも登場する、存在すら定か

ではない「魔王」なのではないでしょうか。読み終えたときにこの「魔王」の意味を考えれば、そこで初めて安藤の能力、犬飼の思想、潤也の能力など、散りばめられた様々な疑問が「見えない何か」を表現したものだと思ふことが出来ます。同時に描かれた作品のテーマも見えてきました。

この「能力」、「政治的姿勢」のように読者に疑問を抱かせ、不透明さを強調することが投げかけられた作品のテーマを表しているものだと思います。世の中には一面だけでは理解することの出来ない事柄が多々あります。真偽が定かではない情報も多いでしょう。こうした情報が錯綜する最中、「自分は何を考え、信じて行動していくのか」ということがこの作品で投げかけられたテーマであったものと私は思います。

この「能力」、「政治的姿勢」のように読者に疑問を抱かせ、不透明さを強調することが投げかけられた作品のテーマを表しているものだと思います。世の中には一面だけでは理解することの出来ない事柄が多々あります。真偽が定かではない情報も多いでしょう。こうした情報が錯綜する最中、「自分は何を考え、信じて行動していくのか」ということがこの作品で投げかけられたテーマであったものと私は思います。

この「能力」、「政治的姿勢」のように読者に疑問を抱かせ、不透明さを強調することが投げかけられた作品のテーマを表しているものだと思います。世の中には一面だけでは理解することの出来ない事柄が多々あります。真偽が定かではない情報も多いでしょう。こうした情報が錯綜する最中、「自分は何を考え、信じて行動していくのか」ということがこの作品で投げかけられたテーマであったものと私は思います。

第二部門：論文



環境問題を考える

経営情報学部医療情報学科四年

那須 美穂

〈はじめに〉

近年、地球温暖化や砂漠化、オゾン層破壊などといった環境問題が大きな問題となっている。テレビや新聞でも度々取り上げられており、私たちの身近なところでもCO2削減として、マイバックなどの対策が為されてきている。人口増加とともに環境問題は年々悪化しているため、国際的に解決策を考えなくてはならなくなった。昨年行われた北海道洞爺湖サミットでは温暖化問題について議論されたことから、世界各国で環境問題は大きな課題となっていることが分かる。この論文では、あまり意識されていないが深刻な問題である「漂着ごみ」と「砂漠化」についてあらゆる角度から分析・考察を行い、私たちができる対策を見つけていくと同時に、環境問題に少しでも関心を持ってもらうことを目的としている。

〈1. 漂着ごみ〉

人々の漂着ごみへの意識はどのくらいあるのだろうか。おそらく多くの人はすぐ頭に浮かんでこないと思う。私も少し前までは温暖化や大気汚染といった、一般的な問題しかイメージしていなかった。しかし最近見たテレビで、漂着ごみの想像を超える実態や危険さを知り、意識が高まった。ここでは西表島を代表に取り上げ、この島の状況を基に考察を行っていく。

漂着ごみとは海岸に流れ着くごみのことを言い、国内で一番被害が深刻なのは沖縄県の西表島である。西表島は沖縄本島に次いで2番目に大きい島であり、水系が非常に発達しており、イリオモテヤマネコやヤヤマヤシなどの国指定天然記念物が豊富に存在する。また、水を浄化しながら豊かな生態系のバランスを守るマングローブが広がっていることで、貴重な自然環境が保たれている。

しかしここ数年で急増した漂着ごみにより、マングローブの枯死が相次ぎ、深刻な状況となっている。地上に現れたマングローブの呼吸根にはローブが絡まり、表皮がはがれている状態だ。マングローブは水の浄化機能だけでなく、広く根を張ることとで砂の流出を防いできた。枯死が進行することで沖合のサンゴ礁の衰退、海岸線の侵食、津波の被害の危険が高まる、生態系への影響などといった問題を引き起こすことになる。

漂着ごみが社会問題として取り上げられるようになったのは、1960年代後半からである。それ以降、プラスチック生産量と比例して増え続けている。漂着ごみを分類別に見ると、プラスチック類が約八十%と大半を占めており、次に発砲スチロール・漁具となっている。これ以外にも医療廃棄物やドラム缶など、生活ごみ以外のものが増加しつつある。漂着ごみの中で一番多いプラスチックは他のごみと異なり、大きな問題となっている。それは、軽い・溶けない・風化しない・分解されないとい

うメリットが、漂着ごみになった途端にデメリットとなってしまうからである。これら漂着ごみの多くは海外からのものである。特に中国からのごみが急増した。十年前と比較すると、中国からのごみは十三倍となり、続いて韓国三倍、台湾二・八倍となっている。中国製のごみが多い原因は、中国のGDPが年率二桁成長を続けることにある。これにより沿岸部を中心に消費が拡大しているが、ごみを廃棄するための整備が追いつかず、そのまま海に捨てられているためであるという。全国的に見た場合、漂着ごみの量は総計約五十万トンであり、そのうち回収されているのは十〜十五万トンで全体の五分の程度にすぎず、また、廃棄費用だけで二百五十億円が必要である。ある地域では年に数回のボランティア清掃活動等で人の手による地道な分別回収作業を行い、莫大な費用をかけて運搬・処理作業を行っているが、漂着ごみは投棄者が特定されないため、処理費用は市町村が負担することが多い。分別不可能なごみは適正

処理困難廃棄物とされ、一般廃棄物処分場で受け入れられないことや、各自自治体が所有している最終処分場も残余容量が逼迫しているため、搬入量によっては受け入れが難しい場合があるといった様々な問題があり、対策は思うように進んでいないのが現状である。西表島では漁業用のロープや発泡スチロールの箱・ペットボトル・電球・ドラム缶など無数のごみが散乱し、まるで産廃処理場である。ごみの上にさらに砂やごみが堆積し、どれほどあるのか想像もできないほどだ。これらのごみを取り除くにも林の中は重機が入れず、手作業では回収できる量が限られてしまう。また、島には廃棄物処理施設がなく、町の予算も小さいため、島外に運ぶ費用は大きな負担となる。

問題は限りがなく地道な作業であるが、コストを抑えるためにボランティアや住民団体の協力を得ることが不可欠である。処理問題では海岸環境保全に資するための基金や寄付金を募ることに成功例があるため、まずは自己の海岸の性質を見極め、それぞれの海岸に合った資金調達法を熟考することが肝心である。また、一度に大量のごみを処分すると莫大な処理費用がかかるため、少量ずつ処理を行う必要がある。海岸美化では、ある地域だけに漂着ごみ問題の責任を負わせようとするのはなく、県内外問わず互いに情報共有し、協力し合う環境作りを進めていくことが重要である。

〈2. 砂漠化〉

次に、中国北部やアフリカで深刻な「砂漠化」について取り上げる。中国では全土の約十八%(日本の面積の約四・六倍)が砂漠化し、四億人の生活に影響が及んでいる(世界では二十億人以上が砂漠の生活に苦しんでいる)ほか、最近では砂が風に運ばれ、大量の黄砂が北京や日本に襲いかかっている。黄砂は三ミクロンほどの大きさであるため肺の奥まで入りやすく、吸い込むと慢性気管支炎や肺炎などの呼吸器疾患を起こしやすくなる。中国の砂丘の広さは東京ドームの十八倍にあたる約八十七ヘクタールである。二十年前は三ヘクタールにも満たなかったが、吹き寄せる黄砂が堆積して毎年成長を続け、年間二十〜三十メートルの速度で北京に近づいている。このため、中国の週刊誌は「北京はいずれ砂漠に包囲される」と懸念している。また、アフリカ大陸では大陸のほぼ三分の二(日本の面積の二十四倍)がサハラ砂漠であり、毎年百五十万ヘクタールもの勢いで砂漠化が進んでいる。中国もアフリカも昔は緑豊かであったが、人口増加(中国)や貧困(アフリカ)による過度の放牧・乱伐・採鉱、その他水食・風食により、砂漠化の進行速度は年々早まっている。砂漠化の原因の約九割はこのような人間の活動であり、砂漠化によって温暖化が進むと2050年には、ブラジル北部の熱帯雨林は草原や砂漠になるといわれる。砂漠化が進むと様々な問

題が起る。参考サイトには主な問題点として①食糧生産減、②飢餓・貧困、③生物種の減少、④干ばつの深刻化、⑤水不足、飢餓により大量の環境難民の発生、という五点が記述されており、各々の簡単な説明は次の通りである。①は2020年には約五千五百万人分の食糧が減産。②は飢餓や貧困により土地の酷使が進み、砂漠化をさらに加速させるといふもの。③は熱帯林が砂漠になると、生物種は千分の一になるといふことであり、④は②と同様で砂漠化の加速を示す。⑤は大量の環境難民が都市や他国へ流出し、国際問題に至るといふことである。中国南部では少雨による干ばつ被害が広がっており、九百八十一万人の飲み水が不足し、耕地約二百六十万ヘクタール、家畜約九百二十万頭が影響を受けているといふ。これは④や⑤に関係している問題であり、このことから①〜⑤は単独の問題ではなく、連鎖していることが分かる。中国とアフリカには、砂漠化拡大への悪循環があるといふ共通点がある。中国では都市部と

農村部で賃金格差が広がったため、農民たちは収入を増やそうと樹木を伐採し開墾を行った。開墾した土地は治水力が弱いため、洪水が起ると土壌が一気に流されて砂漠化が進む。広がる砂漠化が農村部に貧困を生み、貧困がさらなる砂漠化を加速させるという悪循環である。また、アフリカでは多くのアフリカ諸国が深刻な干ばつに見舞われ、人々は生存のために自然資源の過剰採取を行わざるを得ないという悪循環である。このように見ると両国自体に砂漠化拡大の原因があるように見えるが、根本原因は私たち先進国にある。先進国は途上国の安い作物を大量輸入するため、途上国は多くの土地が必要になり、このような結果を招いたのである。以上のことから砂漠化問題は国際的な問題になっていることは確かである。

〈おわりに〉

私たちは様々な環境問題を抱えている。全ての問題に確実に言えることは「原因は人間の行為にある」ということである。生きていく上で環境破壊は避け

て通ることはできないが、必要以上の豊かさを求めた結果が現代に現れているのだと思う。時間がかかるかもしれないが、私生活の見直しやエコな取り組みを行うことで環境破壊の抑制、緑あふれる地域への再生が可能であると考える。環境問題に有効な対策として、①全店舗でレジ袋の有料化、②マイ箸の持参（割り箸削減＝森林保護）、③再利用・リサイクル、④植物を植える（CO₂削減）、などが挙げられるが、必要のない電気を消すといった些細なことでも、実は十分効果がある。対策だけでなく何事にもそうであるが、大切なことは「継続する」ことであり、それが積み重なって大きな結果（効果）を生み出すと私は思う。そしてもう一つ言えることは、漂着ごみの部分で記述したが、ボランティア活動の人たちによって綺麗な環境が維持されていることを忘れてはいけない。

自分が環境破壊の被害者・加害者にならないために、身近な所から取り組みを行うことが重要である。一人ひとりのそうし

た意識が広がっていくことで環境問題は必ず解決できると確信している。論文を作成していく

中で、改めて自然の大切さ、食べ物があることの有難さを実感した。この気持ちを忘れずに、これからも環境に優しい生活を継続していきたい。

〈参考サイト〉

- <http://sankei.jp.msn.com/life/environment/080214/env0802140038000-n1.htm>
- http://www.net.pref.aomori.jp/kassei/senryaku/h17/h170725/sen_coa_rep.pdf
- <http://blog.canpan.info/umimori/archive/169>
- <http://mainichi.jp/life/ecology/archive/news/2009/05/20090511ddm016040002000c.html>
- http://iriomote.com/v3/culture/culture.html#nature_ac
- <http://mainichi.jp/life/ecology/graph/20090401/>
- http://news.searchina.ne.jp/disp.cgi?y=2007&d=0328&f=national_0328_006.shtml
- <http://www.gwarming.com/link/link2/desert.html>
- http://www.tv-asahi.co.jp/hst_2006/contents/special/060504.html
- http://ecogis.sfc.keio.ac.jp/desert/2006/09/post_10.html
- http://news.searchina.ne.jp/disp.cgi?y=2007&d=0326&f=business_0326_004.shtml
- <http://www.yomiuri.co.jp/feature/kankyo/20060904ft04.htm>
- <http://www.kumagera.ne.jp/marutoku/sabakuimage.htm>
- <http://park10.wakwak.com/~ooki/t/sabaku.html>



ブックハンティング2009 自分で選ぼう！学生図書



図書館では、初めての企画である学生選書ツアー「ブックハンティング2009」を実施しました。12月5日、12日、19日の各土曜日3日間実施し、延べ16名の学生が参加してくれました。

「自分で選ぼう！学生図書」というキャッチフレーズで募集したこの企画は、学生の視点を重視し、学生参加によって選ばれた本を図書館に整備することを目的として実施したものです。

ブックハンティング当日は、紀伊國屋書店札幌本店の広い店内を巡って、各々目的の本を選びました。途中、店内にある喫茶店でひと休みしながら、各自熱心に選書してくれました。

参加者からは、「とても楽しかった」、「読みたい本が新たに見つかった」、「個人では予算的に買えない本を大学の図書館で購入して読むことができるこの企画はとても魅力的」、「このような図書館側からのイベントや選書のリスニングのような機会が増えるといい」、「来年もぜひ参加したい」等の感想が寄せられました。

今回選ばれた464冊の本は、現在図書館の入り口正面に展示中で、たくさんの学生の興味を引いています。3月末まで展示していますので、お立ち寄りの際には、ぜひ手に取ってご覧ください。





第4回 プログラミングコンテスト結果報告

システム情報学科 齋藤 健司

受賞者

***最優秀賞 (副賞5万円)**

「Java3DGUI」

システム情報学科 3年
荒木 俊介

***優秀賞 (副賞2万円)**

「BEANS」

システム情報学科 4年
織田 昂

***奨励賞 (副賞1万円)**

「スーパークラスを共有する
2種類のゲーム」

システム情報学科 3年
吉村 一至

「郵便番号検索」

システム情報学科 3年
服部 裕樹

第四回プログラミングコンテストを実施しました。

今回は十九件の応募作品が集まり、第二回と同数ですが過去最多の応募件数となりました。また前回まではJavaプログラムに限定したコンテストでしたが、今回はそれ以外のプログラミング言語も応募対象としたところ、少数ながらObjective-CやPHP、JSP、Visual C++などの作品も応募されました。

一次審査で八件の作品を選出し、12月16、17日の公開二次審査(プレゼンテーション)と、新型インフルエンザの登校制限などのため設定した1月13日の追加審査を行い、受賞者を決定しました。受賞作品の内容は3Dモデリングソフト、アクションゲーム、ゲーム作成基盤となるプログラム、iPhone

アプリと多彩です。受賞作品の詳細は学内サーバ (URL: <https://e314.dohokodai.ac.jp/procon/>) にて公開しておりますのでそちらをごらん下さい。

今回選出された上位の作品を見ると、自分のプログラミング力を高めるための練習課題として作品の作成を行い、実際にアプリケーションとして完成させ、これをコンテストに応募するという姿勢の物が多く見受けられ、コンテストの運営スタッフとして非常に嬉しく思います。

しかし今回は、参加者がシステム情報学科に集中してしまったことと、今回のコンテストで推奨したUML (Unified Modeling Language) などを用いた設計仕様の提出に関しては参加者への周知徹底が十分になされなかったことなどの運用面での課題があり、

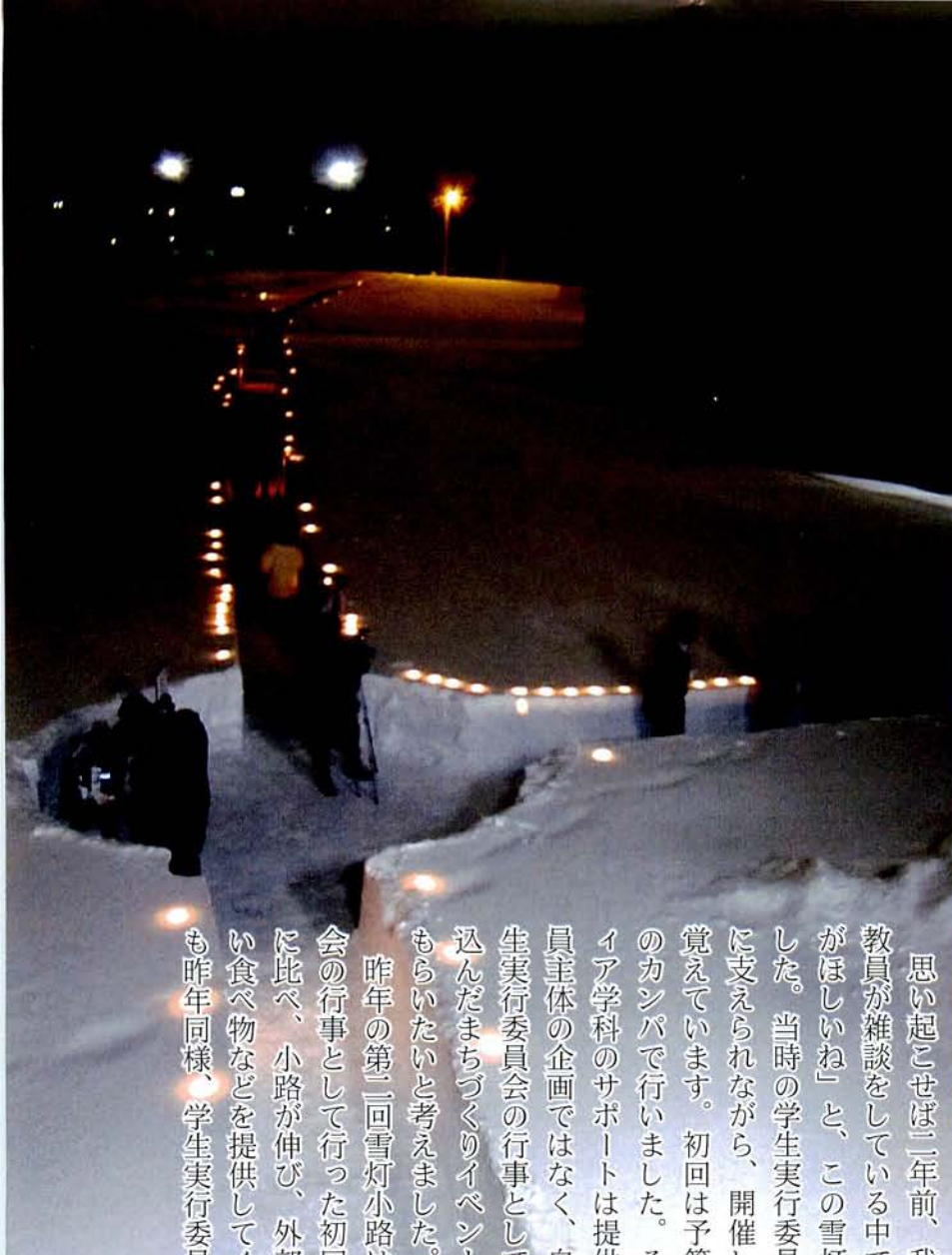
来年度は改善してゆきたいと思っております。

来年度のコンテストでも多くの学生に参加してもらい互いに切磋琢磨して、プログラミングの力を磨いてほしいと思います。

雪灯小路に 参加して

情報メディア学科

隼田 尚彦



今冬で第三回目を迎えた雪灯小路が開催されました。昨年は天気が大荒れで、キヤンドルの炎が消えやすく大変でしたが、今年は穏やかな天候の下で、炎が途切れることもなく雪面に揺らめいていました。その幻想的な光景は、参加者の心を癒してくれたに違いありません。

思い起こせば三年前、我々情報メディア教員が雑談をしている中で、「冬のイベントがほしいね」と、この雪灯小路を企画しました。当時の学生実行委員などの学生有志に支えられながら、開催したことを今でも覚えています。初回は予算もなく、教職員のキャンパで行いました。その後、情報メディア学科のサポートは提供するものの、教員主体の企画ではなく、自由な発想で、学生実行委員会の行事として地域住民も巻き込んだまちづくりイベントとして成長してもらいたいと考えました。

昨年の第二回雪灯小路は、学生実行委員会の行事として行った初回でした。初年度に比べ、小路が伸び、外部テントでも暖かい食べ物などを提供してくれました。今回も昨年同様、学生実行委員の皆さんが一生

懸命頑張ってくれました。雪のスクリーンは、初回から三年連続で設置され、映像作品を映し出してくれました。

この三年間は、情報メディア学科の一部ゼミの卒業研究発表会の後に開催したため、発表会参加者の多くがこのイベントにも参加しましたが、大半の学生は春休みに入ってしまったため、このイベントの存在すら知らないかもしれません。一方で毎年、若干の外部参加者もあります。準備を早めに、積極的な広報を行えば、それなりの参加者が見込めるイベントと考えています。また、えべつスノーフェスティバルと連携するなどの方法も考えられます。

次の実行委員諸君に希望します。体育祭や蒼天祭の準備で忙しいとは思いますが、前期の早い時期に江別市の企画政策部を訪れ、スノーフェスティバルの前夜祭や後夜祭としての位置づけを模索してみてもどうでしょうか。地域に根差した大学の素晴らしいイベントになると思います。来年の雪灯小路に期待します。



一マの絵本・音楽CDセット メディア学部・新井山准教授が参加

◇今回の仕事のきっかけは？
『シユマリ』を企画した須藤修さんは、スープレカレー店の経営者でもあり、札幌や本州方面に店舗を展開している方ですが、私が大学院生のころ、大学の近くに開店したばかりの須藤さんのお店で食事をして以来、今日までお付き合いが続いています。また、そのお店に通うきっかけを作ってくれたのが、私の高校時代の友人でもあり、『シユマリ』に収録されている三作品の作曲と編曲を担当した、作曲家の澤口和彦さんです。作品の構想段階から試作を経て完成に至るまでの過程で、はじめは、お二人との会食などの



2009年11月に発売された、(有) オフィス・ヴォイジュの企画、環境省北海道環境パートナーシップオフィスの協力によるキタキツネの絵本・応援ソングCD「シユマリ」の制作に、情報メディア学部・新井山准教授が参加、ライナーノーツを寄稿しました。

◇ライナーノーツとは？
「簡単に言うと、音楽CDのジャケットに同梱される冊子の中に書かれる、演奏者や楽曲に関する紹介、解説や評論などの文章のことを指します。アナログ盤全盛時代はジャケットが大きかったため、レコード店での試聴サービ

機会を通じて時折その様子を伺ったりする程度だったのですが、2008年の暮れ、澤口さんの推薦もあり、須藤さんからライナーノーツの執筆を依頼され、2009年の3月上旬には原稿をお納めすることができました。」

スなどが現在のようになり前でもなかった頃は、ライナーノーツの内容がアルバム売り上げを左右するということも珍しくなく、現にアメリカのグラミー賞では、ライナーノーツの内容を対象とした部門賞も設けられたほどです。今回、須藤さんから執筆の依頼を戴いたときは、作品を構成するいち部分、いち要素を任されるという意味で、『シユマリ』の制作に関われるということの喜びもありましたが、それ以上に、負う責任を考えると、不安や重圧を少なからず感じることもなりました。」

◇執筆作業は？
「はじめに、ライナーノーツ掲載時のタテ・ヨコの長さ、フォントサイズなどの諸元、さらに、参加アーティストの皆さんの略歴などの情報を、須藤さんから教えていただき、作曲・編曲担当の澤口さんからは、各楽曲に込めた思いや『シユマリ』企画への意気込み、ライナーノーツへの要望などを伺いました。その後、大まかな文章構成を組み立てて執筆に着手したのですが、材料がある程度手許に揃っていたので、短時間のうちに所定の分量を書き上げ、2009年2月中旬には須藤さんに初稿を

キタキツネの自然回帰がテ「シュマリ」の制作に、情報

札幌のカレー店オーナー 須藤さん

キタキツネ 自然のままに

札幌市東区にあるスープカレーの店「シュマリ」のオーナー須藤さん(47)が、「キタキツネの自然回帰」をテーマとした音楽CDと絵本のセットを制作した。観光客による餌付けでキタキツネの野生が失われる懸念が分りやすく伝えるのが、目玉。冊子にも販売を始める(本誌発表)

「餌付けやめて」
CD、絵本で訴え

札幌のカレー店オーナー須藤さん(47)が、「キタキツネの自然回帰」をテーマとした音楽CDと絵本のセットを制作した。観光客による餌付けでキタキツネの野生が失われる懸念が分りやすく伝えるのが、目玉。冊子にも販売を始める(本誌発表)



確認していただきました。須藤さんからは、文章構成、特に、パートごとの文章量配分について見直しの要望があり、それを反映した最終稿を、3月上旬の時点でお納めすることができました。開始当初、作業が長期間に渡ることをある程度は覚悟していたのですが、結果として、想像以上にスムーズな出稿でした。執筆に際し留意した点ですが、作品には数多くのアーティストやスタッフの方々が携わっており、おひとりおひとりが抱えているであろう、作品づくりに賭ける想いや願いを尊重しつつ、尊敬の念をもって、それらのベクトルに大きく反しないような内容で、『シュマリ』という作品のいち構成要素であるライナーノーツを書き上げることを心がけました。

◇作品「シュマリ」について

「まず『シュマリ』というタイトルですが、アイヌ語でキツネを意味します。作品は音楽CDと絵本のセットで、『キタキツネの自然回帰』というテーマで一貫しています。かつて札幌を拠点にミュージシャンとして活躍していた経歴を持つ須藤さんですが、知り合いの旅人添乗員の方から、ツアー客がキタキツネに餌を与えていたのを注意したところ『邪魔するな』と逆にクレームをつけられてしまった、という話を聞いたのが、今回の企画のきっかけです。人間による餌付けによって、キタキツネの生態系が破壊され、エキノコックス症の感染がもたらされるという危険性を、ひとりでも多くの方に知っていただきたいという須藤さんの思いに賛同した多くの方々によって、この『シュマリ』は作られています。また、売り上げの一部は、エキノコックスに感染するキツネの根絶に取り組む団体に寄付されるということです。『シュマリ』の詳細や購入方法については、公式Webページ(<http://kitakita-tsumi.com>)をご覧ください。また、見本盤を用意しておりますので、興味、関心のある方がいらっしゃいましたら、私の研究室まで試聴に来ていただけます。と大変ありがたいです。」

◇学生の皆さんへひとこと

『シュマリ』のアート・ワークと絵本は、札幌在住のイラストレーター『すずめ』さんが担当されています。私の所属する情報メディア学部/学科には、デザイナー・アーティスト志向の強い学生が多く在籍していますので、そうした彼らにこそぜひ購入してもらい、描かれている作品世界をとことん勉強してほしいですね。イラストレーション研究と社会貢献の『一石二鳥』が図れると思います。私はライナーノーツの執筆という滅多にない貴重な機会をいただきましたが、もしも私の交友関係が大学の中だけで閉じてしまっていたら、こうしたチャンスも得られなかったはず。学生の皆さんも、例えば、家の中にこもってひたすら絵を描いたり…とかいうのではなく、積極的に社会と接触し、人脈を広げた上で、自分の『夢』や『希望』を叶えるにはどうしたらいいか、真剣に考え、行動してほしいと願います。苦言になつてしましますが、少なくとも『この業種の企業に就職できなければ、自分の生み出したものが世に出せない、生きていく意味がない。』などというような、凝り固まった考え方にこだわってしまったら、世の中を動かすような『ものづくり』など到底できっこないと思うのですが、いかがでしょうか?」

○BPC開催

2010年1月13日(水曜日)13時から、213教室において、BPC第一次書類審査通過の十三件(アイデア部門六件、ビジネスプラン部門七件)による、第二次審査(プレゼンテーション)を実施した。スタッフ審査員(中村(忠之)教授(委員長)、富士教授、長井教授、谷口准教授、関根専任講師、坂本)と学生による厳正なる審査の結果、以下のように受賞者が決定した。

○受賞者

◇ビジネスプラン部門

- ・最優秀賞……………見年丈治(大学院経営情報学研究所一年)
- 「L.a.C」
- ・優秀賞……………川村龍哉・松島佳輝(経営ネットワーク学科三年)
- 「ヒトカラプロジェクト」
- ・奨励賞……………池島明日美(経営ネットワーク学科四年)
- 「広告付き歯ブラシ」

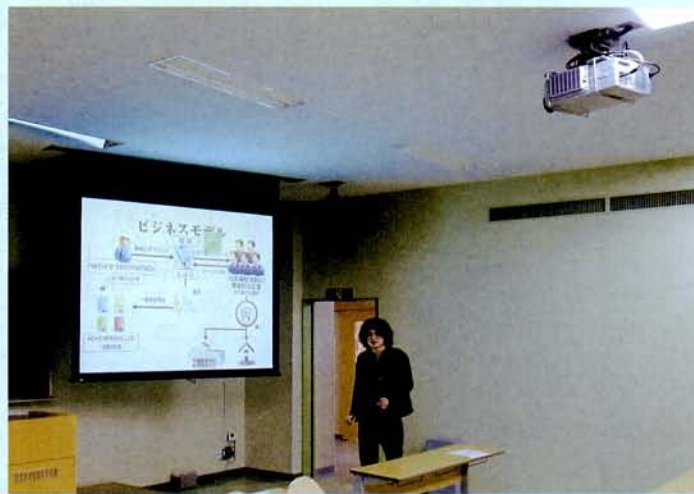
◇アイデア部門

- ・アイデア賞……………川原田光成(経営ネットワーク学科三年)
- 「デザインーズカイロ」
- ・アイデア奨励賞……………高畑友(経営ネットワーク学科三年)
- 「連載系雑誌・無料配送サービス」
- ・アイデア奨励賞……………小幡くるみ(先端経営学科二年)
- 「Sweet Box」

○BPCとは

ビジネスプレゼンテーションコンテスト(Business Presentation Contest: BPC)は、今回で六回目となる。BPCとは、学習活動の一環としてベンチャービジネスの起業を想定し、そのビジネスプランの構築やビジネスアイデアを作成し、その結果を人びとに伝えるにあたって、いかにわかりやすく説得力のある文章で表現できるか、またプレゼンテーションできるかを競う先端経営学科主催のコンテストである。

コンテストは、ビジネスプラン部門とアイデア部門に分かれ、前者は、事業資金の資金調達、中長期経営計画までを要求され、実際にビジネス展開を想定



最優秀賞を受賞した見年君によるプレゼンテーション

した部門である。一方、後者は、マーケットニーズの分析に基づくビジネスのアイデアを提案する部門である。

BPC誕生の契機は、2003年、当時経営ネットワーク学科の主任をされていた現副学長の富士教授からの、学生の企業家精神の触発、プレゼンテーション能力の向上を目的としたイベント企画の提案にある。

2004年に実施された本コンテストの、記念すべき第一回の最優秀賞受賞者は、当時経営ネットワーク学科一年の竹元君だった。彼は、引き続き第二回から第四回まで、在中すべてのコンテストに参加し、そのいずれの大会でも受賞している。

BPC受賞者は、それをきっかけとして、社会で大きく自己の可能性を開花させている。先述の竹元君は、東京証券取引所第一部上場企業、東海東京証券へ就職し、第三回最優秀賞を受賞した森川貴康君(当時システム情報学科三年)は、東京大学大学院へ進学している。

○第六回BPC受賞者のプレゼンテーション内容

ビジネスプラン部門で最優秀賞を受賞した見年丈治君の「ラブランドチャイルド」は、天然素材の香りをつけた衣類や玩具、文具などを「おり香(こう)さんマーク」という統一ブランドで販売し、収益の一部を注意欠陥多動性障害(ADHD)などの福祉団体に寄付するという内容で、このプランは、社会問題を解決しつつ収益をあげるという、ソーシャルアントレプレナーとして



長谷川学長からレリーフを手渡される最優秀賞受賞の川村・松島両君

長谷川学長を中心にした受賞者とプロジェクトメンバー
 (後列左から長井研究科長・富士副学長・坂本・中村(忠之)審査委員長・谷口准教授・川原田君・小幡君・高畑君・中居事務局長・前列左から池島さん・松島君・長谷川学長・川村君・見年君)



の側面を有した仕組みである。

優秀賞の川村龍哉、松島佳輝両君による「ひとりカラオケプロジェクト」は、ひとりでカラオケに行きたくても、人目を気にして行きづらい人たちをターゲットとして、受付を一人にして受付の人たちの間での中傷の会話を気にしなくて済む、あるいは、顧客同士が接点をもたないようにする仕組みを提案した。奨励賞の池島明日美さんは、第四回コンテストアイデア賞受賞に続く応募で、彼女の「広告付き歯ブラシ」は、歯ブラシに広告を募り、飲食店などに配布する仕組みである。

アイデア賞受賞の川原田光成君の「デザインズカイロ」は、本来暖をとるためのカイロを、リストバンドやネックウオーマーに仕立てて、アクセサリ感覚で身につける商品アイデアである。また、アイデア奨励賞の小幡くるみさんは、今回受賞した中の唯一の二年生だった。彼女の「スウィートボックス」は、流行最先端の洋服を、これまでよりも手軽に購入できるインターネットサイトを考案した。

そして、同じくアイデア奨励賞の高畑友君の「連載系雑誌・無料配送サービス」は、特定ジャンルの本格的な知識やハウトウを気軽に学べるパートワークにおいて、専業主婦層にターゲットを絞ったコンテンツを提供する企画である。彼は、そのアイデアもさることながら、プレゼンテーションの巧みさが評価された受賞である。

○今年度のBPCの特徴

今回のコンテストの応募件数は、経営ネットワーク学科・先端経営学科にとどまらずシステム情報学科の一年生から四年生、ならびに大学院経営情報学研究科から、アイデア部門十件、ビジネスプラン部門三十二件、合計四十二件と過去最多となった。その結果として、第一次審査通過のハードルが高く、第二次審査のプレゼンテーションまで駒を進めることが、これまでもまして困難な大会となった。

今回のイベントの盛況の背景には、谷口准教授によるBPCの事前説明会や、BPCの大会責任者でもある、中村(忠之)教授のご尽力はもとより、なによりも学生諸君の知的好奇心と熱意によるところが大きい。

また、初めて学生に審査に加わってもらった結果、プレゼン後の質疑応答において、参加した学生(のべ六十人)から、絶え間なく質問や意見が述べられ、熱気を帯びたプレゼンテーション大会となった。そのため、BPCの名物でもある、六法全書を片手に飛ばされる関根講師からの厳しい質問が、参加学生にとって幸か不幸か、運営時間の制約上封じ込められる結果となった。

スタッフ教員と学生の評価は本質的に一致していたが、ビジネスプラン、アイデアの両部門で、一位と二位が僅差で逆転する現象が生じている。

○表彰式

2010年1月27日(水曜日)14時30分から、学長室において第五回BPCコンテストの表彰式が開催された。式には、受賞者のほか、長谷川学長、富士副学長、中村(忠之)先端経営学科主任(大会委員長兼審査委員長)、長井大学院研究科長、中居事務局長、谷口准教授、坂本が参列し、受賞者には、学長からその荣誉が讃えられ、クリスタルの盾と副賞が贈呈された。

表彰式を学長室で行うことが、第一回以来のBPCの特徴となっている。普段は入ることのない学長室に入室し、学長や事務局長と直接に言葉を交わすことは、厳しい審査を潜り抜け、栄冠を勝ち取った受賞者への小さなサプライズとなっている。

受賞後の挨拶で、ビジネスプラン部門最優秀賞を受賞した見年君は、受賞への感謝の言葉を述べた後に、異なった学問領域を学ぶ学生が、協同して作品を創りあげる、学部学科横断的なコンテスト開催の要望を述べた。

○来年度のBPCに向けて

BPCは、設立時の目的を果たしながら、歴史を重ねてきた。今後は、ここから現実のベンチャービジネスが誕生することを、プロジェクトメンバー一同衷心から祈念している。

○BPCプロジェクトチーム

中村(忠之)、富士、長井、谷口、関根、坂本(文責)



学生サポートセンターからのメッセージ

リーマンショックから一年強が経過しましたが、各種メディア等で報道されているとおり、雇用環境の改善はあまり見られませんが、3月に卒業した学生の就職活動は「売り手」から「買い手」に急変した潮目の年となり、就職氷河期の再来といわれるほど就職活動は厳しいものとなりました。今年3月に発表された文部科学省の就職内定状況調査によれば、大学卒業予定者の内定率は調査開始以来最低の八〇・〇%、北海道・東北地区は七七・八%という数字で、就職情報サービス会社のデイスコによると、このままでは約十三万人が卒業までに企業から内定を取れず就職や進学ができなくなるだろうとの見通しが発表されました。本学の就職内定率は、3月29日現在九一・三%とこの雇用環境の中、皆さんの積極的な活動により健闘したと言っても良いでしょう。

新四年生の皆さん、就職活動で大変苦労していることと思います。四社に一社が業績不振等で昨年より採用人数を減らす予定があるとの数字も出ており、企業が採用に慎重になっていることが窺えます。以前学内報で、職業能力の多くは仕事を通じて形成され、若いときの方がその効果も大きい

ため、まずは正規雇用で就職してみても、どんな仕事でも一生懸命取り組んでみる、ということも大事ですと書きました。皆さんは自分に合った仕事、自分らしい仕事を探そうとします。そして、時として現実離れた理想化された自分を思い描いてしまうことがあります。もしかすると見つかりようもない現実離れた仕事を探している可能性もありますので、今一度客観的に自分を捉え直す必要があるかもしれません。何か就職に関して、困ったこと、分からないことがあればいつでも学生サポートセンターへ相談に来てください。

新三年生の皆さん、就職活動はもうすぐ始まります。三年生のうちに内定をもらう学生も多数おりますので、5月から毎週行うキャリアサポートには必ず参加し、就職活動における最低限必要な知識等を習得しましょう。また、これは一、二年生の皆さんにも言えることですが、現在企業や病院が学生に求める能力はコミュニケーションやマナー、そして問題解決能力、ストレス耐性などです。これらはサークルや部活動、授業、ゼミナールなどの大学生活を通して体得することができます。大学生活を楽しむためにも、これらの能力を身につけるためにも、積極的に行動してみるのが大事です。

平成21年度就職内定率 (3月29日現在)

区分	経営ネットワーク学科	システム情報学科	医療情報学科	情報メディア学科	全体
卒業者数	41	61	38	132	272
就職希望者数	35	49	35	88	207
内定者数	31	45	34	79	189
内定率	88.6%	91.8%	97.1%	89.8%	91.3%



東京で大学説明会を開催

平成22年2月22日(月)東京中野サンプラザで「北海道情報科大学説明会」を開催しました。

この説明会の目的は、首都圏に本社がある企業等に対し、本学の現状や教育内容の説明と学生からの研究発表等を通して、本学が目指している教育研究の方向性やその内容を理解していただくことにあります。

説明会は、松尾理事長の挨拶に始まり、続いて長谷川学長から本学の現況や特色、教育目的等について説明がありました。

学生の研究発表では、医療情報

学科四年
年藤 陽香
さんから「卒業論文発表
医療を支援するIT
」、情報メディア学
科四年 開沼 光滋君
から「リアルタイムス
ライドショーシステム



の開発」の発表があり、続いて医療情報学科四年 吉田 宗顕君と大阪教育センター四年 兼田 美佳さんが卒業生代表の挨拶を行いました。

その後、特別講演として宇宙航空研究開発機構(JAXA)の小澤 秀司様から「宇宙開発と情報技術」と題して、日本の宇宙開発の歩みやJAXAの取組等についてご講演をいただきました。

この大学説明会は毎年開催しており、今年度で十四回目を迎えました。今回参加していただいた企業は百七十七社、参加者数は二百四十八名で、盛会裡に所期の目的を達成することができました。



企業・病院説明会を開催

平成22年3月4日(木)京王プラザホテル札幌で、北海道情報科大学主催「企業・病院説明会」を開催しました。説明会は合同説明会方式で、平成23年3月に卒業予定の学生が興味を持っている企業、病院のブースをまわり、概要や特徴、求人条件、採用日程等を伺うという形で実施しました。三十八企業、三病院に参加していただき、就職を希望する学生のほぼ全員が出席する形で、盛大に行われました。参加した学生の皆さんが早期に就職に対する意識を持ち、積極的に活動を行い、夏休み前を目標に内定、そして就職を決めることを期待しています。

活動を行
い、夏休
み前を目
標に内定
そして就
職を決め
ることを
期待して
います。

留学生の餅つき大会

平成21年12月25日(金)、日中異文化研究サークルの日本人学生の支援を得て、留学生約五十人が参加し餅つき大会を実施しました。

餅つきは日本の伝統的文化的行事のひとつではありますが、最近、一般家庭では観なくなつた光景でもあります。日本で年末年始を過ごす留学生に餅つきを体験してもらい、日本文化の一端に触れてもらいました。

前日に10kgの餅米を洗い、一晩水に浸して準備しておきました。当日は餅つき会場の体育館入り口に、臼や杵を持ち込み、屋外に二つのかまどを設置しました。まずは、二つのかまどの薪による火おこしから始めました。

釜のお湯が沸き、蒸籠の餅米が蒸しあがるまでの時間を利用して、隣のかまどで大なべを使って豚汁を作りました。食材を準備し、調理するまでは屋外作業で苦労しましたが、寒い中でのあつたかい豚汁はとても美味しく、長い学生達の行列ができ完成後僅か五分程度で大なべが空っぽになりました。

餅は四白搗きました。留学生のほとんどは杵を持つのも初めてで、楽しく賑やかに餅つきを体験しました。

餅米が蒸されて搗くことで餅に変化して行く過程を、興味深く観察している学生もいました。

搗きたての餅は、大根おろし餅、きなこ餅、あんこ餅にして試食しました。

留学生にとつては、美味しい一日と同時に、日本では正月の鏡餅、家の上棟式での餅まき、子供の一歳の誕生祝い(一升餅)、入学/卒業、その他お祝い事での紅白餅など縁起ものとして餅が日常生活に係っていることも知る機会になりました。



平成21年度 北海道情報大学 公開講座終了報告

No.	講座名	回数	参加費	参加人数		備考
1	これからの経済・産業・経営	1	500円	一般	7	
2	初めてのデジタルカメラ	4	1,000円	一般	29	
3	食と健康シリーズ(さっぽろバイオクラスター (Bio-S)合同市民公開講座)	5	1,000円	一般	29	
4	デジタルビデオ編集体験講座	6	10,000円	一般	7	
5	流通を学ぼう	4	1,000円	一般	22	
6	3次元コンピュータグラフィックス入門	1	500円	一般	12	
7	フォトショップ始めの一步 入門編	3	1,000円	一般	27	
8	パソコンで季節のグリーティングカードを 作りましょう!	4	1,000円	一般	24	
9	コンピュータを通して古典文学を読む	1	500円	一般	10	
10	夏休みビデオ編集体験講座	2	無料	小学3年生 ~小学6年生	4	
11	夏休み自由研究教室~ロボットで理科を学ぼう~	1	無料	小中学生と その保護者	29	親子10組
12	マーケティングを学ぼう	4	1,000円	一般	28	
13	クレイアニメ「カラー粘土を使って動画絵本を 作ろう!」	3	1,000円	本学学生と 一般	8	
14	地域学講座「ふるさと江別の歴史と文化・再発見」	4	1,000円	一般	22	
15	レベルアップ! フォトショップ中級編	3	1,000円	一般	19	
16	ネットビジネス閑話	4	1,000円	一般	23	
17	ベンチャービジネスを学ぼう	4	1,000円	本学学生と 一般	7	
18	パソコン入門	4	1,000円	一般	29	
19	カウンセリングの舞台裏	1	500円	一般	15	
20	インターネットを使って無料で学ぶ英語	3	1,000円	一般	10	
21	大麻とタバコとアルコール	1	500円	一般	9	
合 計					370	

情報メディア学部
情報メディア学科

斎藤(一)ゼミ

情報メディア学科・斎藤一ゼミナールでは、サイトに豊かな表現力を持たせるプログラミング技術を学習し、ユーザーを魅了するWebサイトやコンテンツの開発・制作を目指しています。三年生は、WordPress&Movable Type等のCMSを利用したオリジナルのWebサイトを企画し実装をしています。プログラミングに興味のある学生については、データベースを利用したWebアプリケーション開発の基礎を勉強しています。四年生は、オリジナルのサイトやコンテンツを調査や議論を通して企画し、その後、企画に沿って実装・評価を行っています。ゼミナールは三・四年生、そして大学院生も一緒に行うことで、先輩から技術的なアドバイスがもらえるようにしています。また、ゼミ生がeラーニング用の教材を制作することも多く、教材についてゼミ生全員で利用評価(通称モルモットアワー)を行っています。ITやデザインに関する勉強以外にも、キックベース演習(写真)やB B Q演習等、様々な企画を用意し、皆で楽しんで勉学に励んでいます。



- 平成21年度 斎藤一ゼミナール 卒業論文のテーマ
- △システム開発
- ・学生の独習支援のためのeラーニング教材検索・推薦システムの試作
 - ・学生間のマルチメディア素材共有を支援するサイト「Hit Page」の構築
- △教材制作
- ・CM制作を題材とした現場ですぐに役立つ教材制作
 - ・基本情報処理技術者試験対策のための Moodle による携帯向け学習サイト開発
 - ・エンドユーザーがネットワーク管理を勉強するための教材制作
- △観光・コミュニケーションサイト開発
- ・PaperVision3Dを用いた「やきもの」を紹介するWebコンテンツ開発
 - ・恵庭市合唱団のポータルサイト構築

経営情報学部
医療情報学科
和田ゼミ

- 医療情報学科は昨年から卒業研究構成で、今年3月に初めての卒業生を、そして本ゼミからも一名の卒業生を社会に送り出します。なお、現在三年生が六名在籍し、さらに新年度ゼミ生が同程度以上入籍予定です。本ゼミのモットーは「積極性」と「実行性」、すなわち「有言実行」です。これを基盤に、次の四つの研究テーマに取り組みます。
1. 医療情報や医療機器の安全管理に関する問題点抽出と、その対策や新しい管理システムの提案。
 2. 特定の医療情報を検出対象とした新しい検出方法の提案とその実用性の検討。
 3. 患者や医療者に精神的影響を与える周囲環境を対象とした最適医療環境のあり方。
 4. 緩和医療やターミナルケア、さらには社会保障など、障がい者に対する医療福祉を含めた弱者への医療体制。

以上、多岐に渡る研究を進めています。特に、医療は人の命を対象にしていることを念頭に、数字やコンピュータとの対話に止まることなく、直接人体や社会に反映できるような人間的な研究を進めています。

勿論、数々のコンパや見学会など、懇親を深めることも忘れてはなりません。興味のある方は是非お越しください。



H I U 演劇同好会

こんにちは。

私は部長の知久貴大です。

演劇同好会は、昨年度の冬に設立したばかりの、生まれてまもないサークルです。しかしながら、設立当初は十一人だった部員も、少ない期間で一人増え、現在は十三人で活動しています。絶賛部員募集中です！

今現在、基礎練習以外の目立った活動はありませんが、秋の蒼天祭には演劇で参加する予定です。他にも夏や冬の長期休暇の間など、他の大学のサークル等と協力して定期的に公演活動をする事を目標にしています。

我がサークルの特徴は、色々と自由だということです。出来たばかりのサークルですので、やりたい事を誰でも提案できます。

部員の中には「ミュージカルをしたい」という人や、「映画を作りたい」という人、果ては「遊びたい」や「カラオケしたい」とまっています。実際に「カラオケしたい」と、カラオケへ行ったこともありませす(笑)。

練習内容は発声や軽い筋トレといった基礎はもちろん、だるまさんが転んだや漫画の読み練習など、日々研究しつつ様々なことに挑戦しています。

楽しいサークルだということは自信を持って言えますので、我がサークルは広く部員を募集しています。こう書くとも必死に見えるかもしれませんが(笑)。

役者をやりたい人はもちろん、照明・音響・小道具や舞台装置に興味がある人、チラシやポスターを作ってみたい人等々…裏方だけをやりたいって人も大歓迎です。「昔ちよつとやってた」「全然経験した事ない」「何かやってみたいけど演劇って良く分からない…」「他の学校の友達が興味あるらしい…」「そう思っているあなたもあなたのお友達も、大歓迎です！演劇同好会に入りませんか？

また、「寸劇をやって欲しい」といった要望にも答えられるよう努力しております。まだまだ今は力不足かもしれませんが、そういうった依頼がありましたらぜひご連絡下さい。

一緒に演劇同好会の歴史を作って行きませんか？

演劇同好会 部長：知久 貴大

74tungsten17chlorhne@ezweb.ne.jp

見学・相談など、何でも大丈夫です！



大学主要行事等

< 12月2日~3月31日 >

◆◆ 教職員の動向 ◆◆

《教員》

■3月31日付

◎退職

教授 嘉敷 侑昇 (先端経営学科)
 教授 齋藤 直機 (先端経営学科)
 教授 前田 隆 (情報メディア学科)
 教授 坂上 修二 (情報メディア学科)
 教授 小山 芳一 (医療情報学科)
 特任准教授 石井 勝 (情報メディア学科)
 講師 森 康一 (医療情報学科)

《職員》

■3月1日付

◎採用

会計課 佐藤真美子

◎配置換

学生サポートセンター事務室課長補佐 橋本 充浩(会計課課長補佐)

■3月31日付

◎退職

事務局次長兼通信教育部事務部長兼大学院課長 吉田 嗣治
 広報室課長 野原 悠久

◆◆ 主要行事 ◆◆

◇法人本部◇

1月19日 労使協議会
 2月 5日 労使協議会
 2月18日 評議員会・理事会
 3月 1日~3月5日 有限責任監査法人トーマツ「平成21年度期末監査」
 3月10日 eDCタワー地鎮祭
 3月25日 評議員会・理事会

◇大学◇

12月 5日 情報メディア学部編入学試験
 11日 経営情報学部教授会
 18日 情報メディア学部教授会
 25日 全学教授会
 仕事納め
 1月 4日 新年交礼会
 9日 月曜講義実施日
 10日 特別入学試験(外国人留学生)
 15日 経営情報学部教授会
 16日~17日 大学入試センター試験
 23日 後期授業終了
 月曜講義実施日
 25日~27日 合同試験期間
 23日 情報メディア学部教授会
 30日 全学教授会
 2月 2日~3日 一般1期入学試験
 5日 学生相談室講演会(14:00~ 115教室)
 8日 南京大学外国語学院聴講生学部・学科・専攻入学試験
 12日 経営情報学部教授会
 15日~20日 追再試験期間
 19日 カリキュラム・アドバイザリーボード会議
 20日 情報メディア学部教授会
 22日 大学説明会(東京)
 27日 全学教授会
 3月 4日 企業・病院説明会
 5日 教育G Pフォーラム
 8日 臨時経営情報学部教授会
 臨時情報メディア学部教授会
 9日 卒業生発表
 情報メディア学部編入学試験(3次募集)
 16日 経営情報学部教授会
 情報メディア学部教授会
 17日 一般2期入学試験
 19日 学位記授与式
 24日 特別AO入学試験
 26日 全学教授会

◇大学院◇

12月14日・15日 学位論文等 事前審査会
 1月29日 学位論文等 公開発表会
 2月 8日 研究科委員会
 13日 大学院入学選抜試験(2次募集)
 25日 研究科委員会
 3月26日 奨学金返還免除候補者選考委員会
 研究科委員会

◇通信教育部◇

12月 7日~11日 後期I Pメディア授業科目試験
 18日 春期第3回入学選考
 18日~20日 後期地方スクーリング(2)
 1月 8日~10日 冬期スクーリング(1)
 23日~24日 後期印刷・インターネットメディア授業科目試験②
 1月29日 春期第4回入学選考
 2月 4日~6日 冬期スクーリング(2)
 5日~7日 冬期スクーリング(3)
 26日 春期第5回入学選考
 3月 5日 沖縄教育センターオープンセレモニー
 19日 学位記授与式、春期第6回入学選考
 23日 東京都立東村山西高等学校との高大連携協定調印式
 31日 春期第7回入学選考

◆◆ 広報活動 ◆◆

◇北海道情報大学通信教育部 入学説明会; 本学独自◇

12月:4会場(東京、名古屋、大阪、本学)
 1月:2会場(東京、福岡)
 3月:2会場(東京、本学)

◇北海道情報大学通信教育部 合同入学説明会; 私立大学通信教育協会主催◇

1月:1会場(仙台)
 2月:8会場(東京、横浜、新潟、名古屋、大阪、広島、福岡、札幌)

<進学相談会>

12月:北海道 12会場(江差、八雲、滝川、留萌、釧路、帯広、札幌(2)、北見、旭川、俱知安、富良野)

1月:北海道 5会場(中標津、根室、伊達、枝幸、名寄)
 2月:北海道 5会場(網走、紋別、稚内、静内、函館)
 東京都 1会場(蒲田)

3月:北海道 6会場(釧路、帯広、室蘭、岩見沢、苫小牧、新札幌)
 神奈川県 1会場(横浜)

<高校内ガイダンス>

12月:北海道 10校(札幌創成高校、札幌北斗高校、札幌月寒高校、札幌藻岩高校、札幌新陽高校、恵庭北高校、札幌南陵高校、室蘭清水丘高校、伊達緑丘高校、札幌第一高校)

1月:北海道 1校(北広島西高校)
 3月:北海道 2校(苫小牧工業高校、帯広農業高校)
 神奈川県 1校(立花学園高校)

<高校内進路講演会>

12月:北海道 3校(上川高校、釧路東高校、斜里高校)
 2月:北海道 7校(旭川明成高校、静内農業高校、札幌新陽高校、新得高校、武修館高校、駒澤大学附属岩見沢高校、旭川龍谷高校)

3月:北海道 5校(双葉高校、富川高校、名寄産業高校、旭川商業高校、津別高校)

<高校出張講義>

12月:北海道 4校(寿都高校、札幌丘珠高校、岩内高校、斜里高校)
 2月:北海道 2校(札幌龍谷学園高校、豊富高校)
 3月:北海道 1校(富良野高校)

<高校訪問>

12月:北海道201校、岩手県30校、秋田県30校、栃木県1校、埼玉県4校、千葉県3校、東京都4校、神奈川県3校

1月:茨城県2校、埼玉県8校、東京都11校、神奈川県3校
 2月:北海道115校、青森県26校、岩手県6校、秋田県6校、埼玉県1校、千葉県1校、東京都2校、神奈川県2校

3月:北海道153校、埼玉県1校

<オープンキャンパス>

3月21日 本学

<入試説明会>

12月13日 本学

◆◆ 主な来学者 ◆◆

<広報室来学者>

12月 3日 北広島西高校(大学見学:生徒27名、教員1名)
 2月 9日 苫小牧総合経済高校(大学見学:生徒20名、教員1名)

編集後記

三月は多くの学生諸君、先生方との別れのシーズンであるが、今年は医療情報学科の最初の卒業生を世に送り出したというところで、関係者の喜びもひとしおと推察される。卒業生諸君の今後の活躍を期待したい。また、本学のために並々ならぬ尽力をされて退職される先生方には、心から御礼を申し上げたい。お疲れ様でした。eDCタワーが完成した暁には、是非また本学を訪れて、最上階からの眺望を楽しんで頂きたいと思っております。(U)

学内報について、ご意見、ご要望などがございましたらnanakamado@do-johodai.ac.jpまでお寄せ下さい。